

# 『相伝義書』 相伝家の聖教目録について (二)

— 玄誓・空閑の事跡と空恵の『聖教目録』 —

庄 司 暁 憲

## 第一節 西念寺玄誓の事跡

### 第一項 玄誓の出自と西念寺

はじめに

此の度、西方寺空恵の『聖教目録』一巻を考察するにあたり、空恵の師匠である玄誓と養父である空閑の事跡を先きに論じてから、後半において、空恵の目録に言及したく思うのである。その理由は、目録中の空恵撰述部では、その著述に師玄誓の負う所が多くあり、また、空閑に關しては、空閑が書写した書籍類を目録の第一編に掲載していることにもよるのである。

玄誓は、京都伏見光啓寺の忍誓の子として生まれ、母は、西方寺空誓の娘妙雲であり、西方寺第八世空了の姪と言われる。この空誓は、西方寺第五世の空誓とは別人である。なぜなら明応三年（一四九四）に没している年代が合わないからである。

玄誓は長じて、山城国南山科勸修寺村の西念寺に入寺し、第六世を継承したのである。この西念寺とは、初代が蓮如上人の教化を蒙った中村源六郎入道益慶徳であり、第二世明了、第三世順西、第四世順誓、第五世清閑と次第してきた寺である。

## 第二項 学僧としての玄誓

玄誓のことについて、『西念寺系譜』には、『草創期に於ける大谷派宗学史的考察』岡崎正謙著「宗学研究」P92より引文す）

六代目

元禄三庚午年  
十二月二十四日

慶廉 釈玄誓法橋

本願寺堂僧召出

とあり、姓は中村で、名は慶廉よしかたということが分かる。そして、東本願寺の堂僧として採用されたともある。よつて玄誓は、当時の堂僧すなわち学僧であったのである。彼の師匠は、西方寺第九世賢了（淨林坊休之一五八八―一六五七 七四歳没）で、その門下生であったと思われるのである。また、堂僧として出仕した時は、先輩格として誓源寺円智がいたのである。

慶安五年（一六五二）の一切経校合の厳命の折、玄誓は、当時一臈職であった専念寺（後号西方寺）賢了の指揮の下に堂僧の円智や常德寺休甫らと共に校合に加わっている。また、『帖外御文』七四通の編纂にも賢了の下で参画しているのである。そして、『西念寺略記』には、『草創期に於ける大谷派宗学史的考察』p192より引文）

玄誓は、本山淳御門主に仕へて、常に六条に居住し、専ら一宗の奥義をうかがい、古録を考へ、当家学匠の名を得たり。剩あまへ、諸宗

の教相に渡り経論の要義を述す。当家の故実に於ては悉くこれを考う。又、法談勸化の弁説、甚あざやかにして、聞人感ぜずということなし。故に都鄙の僧俗尊敬すること、草叢の風になびくがごとし。因て今に於て一宗の学問、一宗の故実、此師をこい慕う。

とあり。玄誓は、宗義やその弁説に優れ、また故実にも精通していたので、第十四世琢如上人は、東六条に西念寺の別業を創して、彼を居住させたというのである。

そして、賢了亡き後（一六五八年没）、一臈職には円智が就いた。万治三年（一六六〇）には、親鸞聖人四百回忌法要のために琢如上人の御書披露に、玄誓は円智とともに大阪天満へ出かけている。その翌四年に御遠忌法要は厳修された。

また、玄誓は、寛文二年（一六六二）十月八日と、翌三年二月二八日との二回にわたり『正信偈』を常如上人の御前で講義しているのである。更に、学寮創設（一六六五）当時には、円智を総括者として、玄誓をはじめ東坊了海、長覚寺憶慶、常德寺休甫らの堂僧が、所化僧（学徒）の指導や監督の任にあつたのであったのである。

寛文六年（一六六六）には、本堂再建の使僧として玄誓と徳応寺照空とが、五畿内に派遣されている。

同年十一月には、かつて本法寺教映の本法寺事件（一六三八―一六四二年の間）があり、父教映と息子良秀は破門状態になっていたのを、この時公海僧正（教如上人の娘如頓尼の子）の仲介により復帰を願い出た。

常如上人は、堂僧らに良秀の調査を命じ、十一月十九日に円智や玄誓、法光寺賢恵らは、その件の協議を謀り、不許可の決議を言上したが、常如上人は、僧正からの依頼を重じて復帰を許可されたという出来事があった。

その後、円智（一六七〇年没）や了海（一六七四年没）の亡き後は、玄誓、噫慶、西福寺恵空らの堂僧が、学僧の教育等に従事することになったのである。

所で、寛文十二年（一六七二）七月一日に琢如上人の弟で連枝の智光院宣縁（従因、大信寺退寺）は、玄誓の故実に興でているのを賞賛して、父宣如上人の御影を授与したのである。そしてそのわずか十四日後に宣縁は、示寂してしまったのである。

延宝二年（一六七四）に起こった新湯法中と能登浄明寺との法論諍事件の時には、恵明院如晴（によしず）を中心として玄誓や長福寺齋円、休甫らがその取調べや教導に携わったのである。そして、玄誓は、休甫とともにこの事件の所見を「十条反問之評」に認めたのである。

延宝三年（一六七五）には、唐本「一切経」が、大阪の二八日講によって、本山に寄進される際に、玄誓はその斡旋の労をもったのである。

延宝六年（一六七八）には、玄誓や南溟寺樹心らは、学寮に講堂の施設がないことで、その必要性を常如上人に説き、その結果枳殻邸西側に講堂が新設されることにもなった。

貞享の頃（一六八四―一六八七）、玄誓は、先輩円智とともに嵯峨の

二尊院へ古籍の調査に向き、そこで「漢語灯録」を発見しているのである。

### 第三項 玄誓の子息と年寿

玄誓には、四人の子息があり、長男受円、二男空閑、三男立円、四男浄入である。そのうち長男受円は、西念寺第七世を継ぎ、二男空閑は、母方の西方寺第十一世を継いだのである。三男立円は、洛東に浄真寺を興して住持し、また堂僧としても任じられて、権僧都に補されている。四男浄入は、在俗して中村半三郎と名告っていたという。

玄誓は、元禄三年（一六九〇）十二月二四日に入寂する。門下生であった空恵は、師匠の玄誓を讃仰して自撰の「無量寿経綱維鈔」分科下巻の奥書に（「大谷派学事史」続真宗大系第二十巻より引文）

爰（こゝ）洛陽に玄誓法橋なる者有り。西念寺に寓すること有年。真宗の陶練、最も其の奥を究めて、屢（しばしば）、経論を講じ、鎮（つひま）て徒衆に倡（しやう）すと讃じている。つまり、玄誓は、宗義の奥義を極め、経論を講義する時は、聴衆者に対してその内容は実に丁寧なものであったというのである。

所で、学寮創設（一六六五年）をその基点にして創設以前を「宗学の草創期」というならば、創設から後十二年間を「学寮の初期」と言うことができよう。いま、この玄誓が活躍した時期は、宗学草創期後半から学寮初期にあたるものであり、そして、初期の学匠中としては、円智・

了海に次ぐ存在であったと見做すことができるのである。

また、玄誓の研究文献は、二男空閑にその全てが相続されたと思われるのである。

最後に、玄誓の寿年が不詳となっているので、その推定年寿を少し考察しておこう。玄誓が、二男空閑を寛永十八年（一六四一）に生んでいることや、上記の業績などを勘案していくと、彼の寿年は次の如く想定されるのである。

（推定）一六一七年生〜一六九〇年没（確定）の寿年七四歳（推定）位いと見ることができるようである。

## 第二節 西方寺空閑の事跡

### 第一項 空閑の学僧について

空閑（後号専修坊 一六四一〜一七二一 七一歳没）は、寛永十八年に西念寺玄誓の二男として生まれた。その後、寛文五年（一六六五）正月、二五歳の時に母方の在所寺である西方寺に第十一世として入寺する。

【城州伏見西方寺歴代系譜】には、次のようにある。（『統真宗大系』第二十卷「大谷派学事史」p18より引文）

釈空閑 西方寺第十四世、後号専修坊、数多の聖教を書写し、当寺に凡そ二百三十部納む。元と山科西念寺玄誓法橋の二男、当寺歴住二十余年、（中略）正徳元、八月二十七日寂、七十一歳

ここに、「第十四世」とあるのは、後世に世代を途中に増加したため相違が生じたものであり、空恵が「聖教目録」の中で、養父空閑を「西方寺十一世」と呼んでいることから、空閑が第十二世であることは確かである。

所で、一般的には、空閑は学僧であり、本願寺の堂僧として仕えていたとも考えられている。それは、日下無倫氏によると

空閑は、玄誓附法の真弟である、（中略）父玄誓の遺志を継いで、日夜勤学に倦むことなきを以て、自らを専修坊と号した。特に父より附与せられし数多の考録はこれを<sup>きもとて</sup>根底に秘して、堅く他見を誠めた。  
（『初期宗学界に於ける西方寺空恵の研究』）

と、空閑が、父玄誓の学業を引き継いだ学究僧であると評している。ついで「大谷派学事史」（p18）では、

慶秀・円智の著述の如きは殆ど之を自写している辺より察すると、時代的に見て、恐らくは円智に師事した人であろう。

と記述されている。また、岡崎正謙氏は、円智の系統に属する学匠であって、恐らく円智の門人であろうと思う。空閑がいかなる学識を有して居ったかは、その著述の遺れるも

ののなきために、これを明らかにすることを得ないが、故実学者の玄誓を父とする空閑は、恐らくこの方面においての学匠であったろう。

〔草創期に於ける大谷派宗学史的考察〕

と、述べているのである。しかし、かく言う空閑について学寮での活動について全く不明であり、確固としたる根拠はどこにも見い出すが出来ないものである。

## 第二項 空閑の書写典籍について

空閑は、上記の資料が述べることく、宗乘に關係する書籍類は、その大半を書写しているのである。また、存覚の「浄典目録」に記載されている書物名のうち覚如上人著述類は全て書写しており、存覚師著述類も「纒解記」一卷を除き全て書写している。また追加編は、「信貴鎮守講式」だけがなく残りの書物名の「浄典目録」以下四部全てが書写されているのである。

そして、この空閑の書写した典籍類の目録が、没後に養子の空恵によって作成されたのである。空恵は、自撰の「聖教目録」一卷の第一編に

西方寺十一世専修坊積空閑聖教書写部類

と内題を置いて、前半部は、著述者別に書籍を整理して書物名を列記し、後半部は、ある程度の部分で同種類別に列記しているものである。そして、空閑が書写した書物類の総部数を「都合二百三十九部」(実数は二二一部)

「相伝義書」相伝家の聖教目録について(一)

と記している。現代人の我々からすれば、「教行信証」六巻でさえ書写することは大変な気力と根気が必要であるのに、二二三部(含追加二部)ものぼう大な数を書写したということであるから、全く気の遠くなるような話である。

また、上記資料などで、慶秀・円智の著述類のほとんどを書写しているとの指示があるので、次に慶秀と円智の著述書の書写部のみについて記すことにしよう。

それは、「安心決定抄私記」と「持名抄私記」一卷の二部の下記に「慶秀作」となっている。また、円智のものは、「和讃料考」一卷、「歎異抄私記」一卷、「和讃私記追加」一卷、「七条鏡」一卷の四部の下記に「円智作」又は「円智述」と記されている。ただし、この撰述者名は、空恵が他の目録を擬ねて書物名の下記に書いたと考えられるのである。例えば、「七条鏡」は、実は真行寺了現の撰述したものである。又、「正信偈私記」や「和讃私記」は、「大谷派学事史」(P4)によると、

慶秀の遺著としては、「正信偈私記」二巻・「三帖和讃私記」六巻・

「御伝鈔私記」四巻・「持名鈔私記」一卷・「安心決定鈔私記」二巻(中略)「破邪顯正鈔私記」・「顯名鈔私記」等のあったことが知られる。

とあり、「正信偈私記」書入一卷と「和讃私記」書入全部五卷合三巻の二部は、当然に慶秀の作でありながら、その書物名の下記には撰述者名が付記されていないなど、不備な点があることを指摘しておきたい。またその理由としては、空閑は、父玄誓より数多の聖教や講録、或いは了

解類の秘書などを付与されたのであるが、これらを置箱おきばこの奥底に収蔵し

て他見は勿論、義理の息子の空恵にも滅多に拝眉させなかつたようである。それで、空閑が死去するまで、置箱中の書籍や師匠玄誓の著述類などを自由に見ることが出来なかつたと思われる。それが、正徳元年（一七一）に養父空閑が示寂することによって、その置箱が空恵によって開封されることになった。所が、空恵にとつては、置箱中の多くの書籍類は、その時初めて対面するものもかなりあつたとみられ、その書籍の由来や撰述者名などについて余りよく知らなかつたと思われるのである。それ故、撰述者名の誤記や記入漏れなどが生じたものと窺われるのである。

### 第三項 空閑の聖教目録について

空閑の聖教目録については、今日何も現存していないのである。

空閑は、父玄誓からの多くの典籍類の付属もあつたが、自身でも三百余りもの書籍を書写するなど、その聖教の収集には非常に熱心であつたといえる。そして、存覚の「浄典目録」一巻も書写しているが、自ら聖教目録を作つたかどうかは判明していないのである。

しかし、推測の上ではその可能性も存在すると言わねばならないであろう。それは、空恵の「聖教目録」一巻の第三編と第四編の奥書には、  
(第三編目録の奥書)

正徳二壬辰年

六月二十五日改之 西方寺

権律師 空恵

とあり、第四編目録の奥書には、

正徳二年六月二十五日書之

西方寺 釈空恵

とあつて、明らかに第三編の「改之」と第四編の「書之」とを書き分けられているところからみれば、第三編目録の「西方寺安置印判書籍目録」の方は、書き改めたという意味に読みとれる。つまり、この正徳二年とは、空閑が入寂した翌年であり、西方寺の全権が空恵に移譲した時期でもある。そこで、空恵は、蔵書を点検したところ、従前からある(仮称)「安置目録」では、既に漏れているものもあつたであろうし、又、空恵自身の所持本を少なからずあつたことから、新たに書き改めたと思われるのである。

そこで、問題となるのが、従前からあつた「安置目録」は、誰れが書いたものかということになる。まず、空恵自身が撰述したということは、程んど考えられない。なぜなら空恵の「聖教目録」一巻の撰述より前になると、父空閑の存命中にあたり、従つて書籍類の管理は空閑が厳しくしていた筈だからである。

あとは、推測の域を出ないのであるが、空閑は、父玄誓から多数の典籍類を付属され、それを厳しく保管する上において、その書籍類の目録

を作成して管理に務めたのではないかと推察する次第である。現物確認はされていないが、『聖教目録』の第四編の「小本部」の最初に掲げる『書籍目録』五(巻)は、ひよつとしたら、旧来の「安置目録」かも知れない。空恵は、第一編では、親鸞聖人の著述を冒頭に掲げたり、第三編では、父了賢の所持本を初頭に挙げたりしている点から、「小本部」でも空閑の目録を初めに掲げていたとも考えられはする。

そして、正徳二年の時、空恵は、新たに自撰の「安置印判書籍目録」を作成したと、このように解せば、「改之」と記した理由も領づけてくるのではないだろうか、窺われる。

最後に、空閑の没年時を記するならば、正徳三年八月二十七日に七十一歳で示寂する。空恵が五一歳の時である。

### 第三節 西方寺空恵の略譜

#### 第二項 空恵の出自について

空恵(太阿・寂印・休隠 一六六一―一七四六 八六歳没)は、寛文元年(一六六一)に佐渡国佐渡郡河崎村字椎泊の東派長善寺了賢の十男として生まれた。空恵の撰述した『真宗要決』下の奥書に、自叙伝を載

せているので、それによると、『統真宗大系』第十一卷p44)

余維の北域佐渡州の生を受く。姓は首藤、長善寺了賢太愛の十男。母は白井氏、妙賢尼と号す。延宝第四、十月二十一日州の西蓮台に於て除髪す新。法秀法師が師と為す。同六年復六月、華洛のほに躋る六歳。始め玄以法橋に託す。次に玄誓法橋に謁す。後に学林に入り、恵明院和向和尚に奉仕すること有年なり。貞享元、秋九月六日空晴マツ法師と号すの譲りを受けて城南伏見縣西方寺に寓す。

とある。父は、長善寺三世了賢(一六〇八―一六八二 七五歳没)で、母は白井時久の娘で法名妙賢(一六一二―一七〇五 九四歳没)であった。日下無倫氏によると

父了賢は、諱を太愛といい、性よく学を好み、漢玉篇七卷を暗誦して徳声遠近に聞えた。世に行はるる「韻鏡手鏡」は、実にその人の撰する所。(『初期宗学界に於ける西方寺空恵の研究』)

とあり、父了賢は、漢籍に秀でた学僧であったという。また、空恵の「聖教目録」第三編には、「三部図経」二部を挙げて下註に「内一部 佐州長善寺了賢太愛遺物也」と記していることから、父了賢からの付属典籍であることが知られる。すぐ上の兄恵南は、佐渡の真言宗大聖院の住持となり、別に長安寺も兼務していて、空恵と同じく学究膚の僧である。

空恵は、延宝四年(一六七六)十六歳の時、佐渡郡金井村中興の西蓮

寺法秀の下で得度した。彼は、後年この師法秀に対して、自撰の『浄土文類管解』の奥書に（右同より引文）

佐州西蓮台に釈法秀という者有り。鎮て此の典を崇む、偏えに栖心の宅と為す。余雑染の師と為す。既に去ること閻浮有年、しかも雖ども、彼の遺語虚棄し難き。

と述懐していることから、『浄土文類聚鈔』を法秀から手解きを受けたと思われるのである。そして、その二年後の延宝六年（一六七八）の夏に、若千十八歳で京都に上り、初め三条の福円寺玄以に身を託して、そこで修学を積んだ。この師玄以については、

爰に洛都に玄以法橋という人有り。聡明叡智にして、卓は犖才也。敲推は数才の労益を精す。茲に困って緇素に化を浴する者、其の員を知らず。

（『真宗全書』巻七『阿弥陀如来三種印相秘決義解』の奥書p33）と述べて、師玄以の知識は、多岐に秀でて、その著述は、数年を費やす精密さを極め、多くの学生僧に指授を施したというのである。

その後、空恵は東本願寺の学匠である西念寺玄誓に拝謁して、学林（学寮）生となったのである。そして、恵明院如晴の門下生として宗学の研鑽に励んでいたというのである。

空恵は、貞享元年（一六八四）に西方寺第十一世空閑の養子として入寺することになる。『城州伏見西方寺歴代系譜』には、（『大谷派学事史』

p30より引文）

貞享元、九月六日、二十四歳 当寺に寓す 歴住二十五年とあり、それはおそらく師匠の西念寺玄誓が、空恵の学徳を認めて子息空閑が入寺した西方寺の後継にと勧めたことによるのであろう。時に空閑は四四歳であり、空恵との年齢差は丁度二十年であった。最初空閑の長女伊佐の婿となったが、二年後の貞享三年（一六八六）八月十六日に入寂（二一歳没）したので、次女の遊志を妻に迎えた。下の三女の後は、父空閑の在所西念寺受玄に嫁いでいる。

## 第二項 空恵の学僧としての事跡

空恵は、貞享三年（一六八六）の夏に、同門の請いもあって『観経四帖疏』の講義をしている。また同年に『浄土論註』も開筵している。元禄三年（一六九〇）に師事していた玄誓と死別することになる。空恵三十歳の時である。元禄六年（一六九三）八月十一日に権律師に任じられたのである。

所が、記録の上からは、空恵はその貞享三年以降から享保四年（一七一九）までの三三年間のうち、宝永元年（一七〇四）に一度きり『三帖和讃』を講じているだけである。その理由についてはよく分からないのである。

そして、養父空閑が没した正徳元年の五十一歳の時、仕えていた連枝



の恵明院如晴から「愚禿鈔考記」三巻を賜わってより以後、空恵の華々しい活躍が始まるのである。その業績の詳細は、後掲の付録二「西方寺空恵の事跡年譜」に讀ることにする。

空恵は、本山学寮で二度(四回)講義を行っている。一度目は、享保十年(一七二五)五月九日より五月十八日まで「浄土和讃」を講義(一回)。翌十九日より六月九日まで「高僧和讃」を講義(二回)。そして六月九日まで「正像末和讃」を講義する(三回)。この時、第十七世門主真如上人より晒布を賜わっている。二度目は、六九歳の時で享保十四年(一七二九)四月十五日より五月二十日まで「安樂集」を二八座講義している(四回)。そして、七月一日には、空恵が隠居したということである。

隠居後、空恵は、仮住いする洛東の蓮花王院の側の小坊や、伏見西方寺の自坊を始めとして、長浜、大阪、和歌山と各地で講義を行っている。しかし、学寮での講義は、その後二度も行っていないのである。そして、その著述の数は、非常に多くて七十部に及び、内容も、宗乗から史伝、伝記、寺誌、地誌等に涉って幅広くなされているのである。

また、講義の回数も、生涯のうちで四二回と数多く行っている。そして、その講義題目も「大経」・「浄土論註」・「安樂集」・「親経疏」・「撰釈集」・「正信偈」・「三帖和讃」と多種に及んでいる。更にその会所も本山学寮では二度(四回)、八尾大信寺で五回、願得寺で七回、自坊西方寺で六回、願樂寺で三回、即円寺でも三回、徳正寺で二回、洛東の小坊で

二回、教行寺・平野恵光寺、長浜御坊、伊勢真樂寺、常福寺、常念寺、泉証寺で各一回づつ行っていて、あと会所の不詳が三回あって、合計四二回である。

空恵の門下生としては、その研究調査が十分に行われてはならず、そこでここでは、空恵と何らかの関係のあった者たちを挙げておくことにする。

まず真弟の西方寺第十三世正恵(一六八七―一七六四 七八歳没)と願樂寺第十一世浄恵(寿量菴 一六九四―一七六八 七五歳以降没?)がいる。正恵には、延享五年(一七四八)頃の「蓮師講式」一卷の著述があり、弟の浄恵には、明和五年(一七六八)頃完成の「真宗故実伝来鈔」上・下・追加(目録)・増補(目録)の四巻を筆頭に、「教如上人御伝略並法談」一卷、「親鸞聖人伝略」(宝暦十年、一七六〇)、「八齋戒隨身記」(願樂寺の浄恵作か疑問)の四部の著述がある。

他の門下生としては、祐念寺恵照、恩任寺恵春、佐渡の伊藤順祐、徳正寺第八世祐意、上坂澄勝(法名了源 一六五六―一七二七 七二歳没)とその息男の兼勝(了廓 一六九〇―一七四〇 五一歳没)と孫の上坂惟勝の三代、常福寺円誓、正樂寺賢哲、親戚の受賢(西念寺か)、正円寺乾外、慶念寺誓旭、即円寺了閑、吉村浄智(一六五六―一七二四 六九歳没)と子息吉村好信、西来寺六世禅恵、伏見興禅寺覚恵(西派)等の人たちがいる。

また、それ以外に親厚のあった人たちは、黄檗山万福寺の院主ら脱峰・

泉堂・寿泉日峰と、藤原広豊卿とであったのである。

所で、空恵は、晩年の七九歳の時、即ち、元文四年（一七三九）に記した自叙伝には、「統真宗大系」第十一巻）

各おのづから 勒おとえて而じてこれを栖せ心藏ざうに納む。然りと雖も、妨碍は多端

にして、而じて未だ弘く講じず。是れ最も慨然た為り

と述べている。つまり、自著した書物類を全て西方寺の栖心藏に仕舞い込んだにもかかわらず、尚も「妨碍多端」を受けて、中央にて講釈が出来ないようになったのは、悲嘆と共に憤怒を覚える限りである、とその胸中を吐露しているのである。しかし、空恵が蒙ったという妨難は、いつのことであり、どんな内容であったのか、現在のところ不明である。

また、空恵の僧綱は、元禄六年（一六九三）に権律師を賜わってから、最後までそのままであった。所が、玄誓の三男立円は、権僧都に補せられている。それは、空恵自身が、本山での評価を余り得ていなかったことによるものであるうか、とも推察されるのである。

ついでであるが、空恵には八人の子供がいた。長男正恵、次男恵頓（若死）、長女妙智（若死）、三男浄恵、次女弥佐、四男英昌（首藤政衛門、伏見大亀谷居住）、三女遊佐、四女久米である。

### 第三項 空恵と相伝家寺院との関係

#### 一 願入寺との関係

空恵は、自叙伝の中で恵明院如晴（一六五一―一七二二 七二歳没）に永年奉仕したと述べている。この如晴は、第十五世常如上人と第十六世一如上人の弟で、父琢如上人の遷化によって急きよ得度（二二歳）して、直ちに学寮との関係をもった人である。その後、岩船の願入寺の住職となり、連枝格で学僧でもあった。相伝家側では、この如晴を相伝家の一人と見做している。

空恵は、正徳元年（一七一二）の夏に、如晴と、八尾大信寺深広院常智との二師から「愚禿鈔」の註釈書を作るように命じられ、如晴からは、更に「愚禿鈔考記」二巻も拝領している。しかし、空恵はこの二師の存命中にはそれを果すことが出来ず、その二十年後の享保十六年（一七三二）八月、命に報いて「愚禿鈔試解」四巻を草稿した。そして九年後の元文五年（一七四〇）には、それに改補を加えて「愚禿鈔試解並分科」四巻として完成させたのである。

#### 二 大信寺との関係

如晴と共に空恵に命じた常智とは、常如・一如・如晴らの弟晴含（一

六六八―一七二七 五十歳没) のことであり、大信寺第三世恩光院琢性(瑛含 一六四九―一七〇〇 五二歳没) が、一如光海と改号して門主になったので、その後を承けて大信寺第四世となった人である。

正徳三年(一七二三)には、

正徳癸巳秋八月。深広院殿常智和尚の高命に依つて、これを記し案下に捧ぐ。和上歡喜して、而じて秘決鈔と題す。然るに智公命じて云く。必ず門弟の氣稟ひんを閲して、此一軸を授与し、以つて印可と為す可き也。

〔真宗全書〕卷七三「雜文集」

とあり、常智は、空恵に命じて「秘決鈔」を書かせている。更に、翌正徳四年(一七二四)二月には、「報恩講式嘆徳称揚鈔」三巻の著述も命じていて、同年の七月に空恵はそれを完成させている。

この常智は、相伝家の一人であることが十分に推測される。それは、「相伝義書」の巻物類の「第一巻」には、

深智博覧の機質あり。或は、鈍根淺識の機、性得あるべし。所詮、ただ教信教行証の器きを感察して、其人にあらざれば、授与口伝なきこと代々分明なり。

とある内容と、常智が空恵に命じた

必ず門弟の氣稟を閲して、此一軸を授与し以つて印可と為す可き也との文面との間には、そこに同じ体質が流れていると見受けられる。「氣稟を閲して」とは、門弟の天性や能力をよく調べてという意味である。そしてこの「秘決鈔」の一軸を授与させて印可とする発想は、全く相伝

の伝授(箱伝)の仕方に酷似しているからである。

又、空恵は、常智没(一七二七年)後の享保六年(一七二二)閏七月に、大信寺で「浄土和讃」を講義している。そして享保八年(一七二三)に常智の長男明了院真智(性含 一七二二―一七四五 三四歳没)が若じやく干十二歳で、第五世を継いだのであるが、この新発意の教育のためもあってか、空恵はその後三年に涉つて大信寺にて講義を行っている。即ち、享保八年五月二十九日より六月二三日まで「高僧和讃」(二二座)、同九年八月二日より二一日まで「正像末和讃」(二二座)、同十年八月に「浄土論註」(三三座)を講義している。

この真智には、三歳下の弟円妙院真覚(超芸、一七一五―一七六一 四七歳没)がいて、当時若年の兄弟は、この空恵の講義を聴講していたものと推測されるのである。弟真覚の方は、享保十年(一七二五)に真宗寺第十六世として入寺することになる。そして、この兄弟は、後に延享二年(一七四五)五月、東本願寺第十八世従如上人の相伝儀式の折り、御相伴に加わりその時相伝家となっている。真宗寺自体はその時より相伝家の寺院となる。この時、御返伝役を務めたのが、光善寺第十世本乘院一玄(海頭 一六八三―一七四六 六四歳没)である。

所が、真智は、この年の十一月二日、三四歳の若さで没したので、弟の真覚が、真宗寺と兼務する形で大信寺第六世を継ぐことになったのである。

### 三 恵光寺との関係

空恵は、元文元年（一七三六）六月七日に、恵光寺系の怪巖（不詳）の寺で『選択集』の講義をする。その時、怪巖が筆録したものが『選択集聞書』一卷となって残されている。その翌元文二年（一七三七）五月五日、平野恵光寺第八世性俊（願力院真行 一七〇一―一七五〇 五十歳没）の請いによって同じく『選択集』を講義している。又その折りに『恵光寺記』一卷も著述している。

この頃に、恵光寺にいたのは、性俊とその子息性澄（真淳 後号真芸 一七二八―一七五七 三十歳没）とである。性澄はまだ九、十歳位であったが、父と一緒に空恵の『選択集』を聴講していたことであろう。また怪巖については、不明で分らない。また、性俊や怪巖が相伝家のものであったかどうか、現在のところ不詳であるが、性澄は後に、教行寺第十世を継いで、発深院真芸（性琇）と改号し、宝暦二年（一七五二）に大信寺真覚より相伝を授与されているのである。

### 四 願得寺との関係

空恵は、享保七年（一七二二）四月一日より五月十日まで、願得寺にて『浄土論註』を三八座講義している。更に同五月には『観経疏玄義分』、『浄土論註』をも講義している。この時、願得寺の住職をしていたのは、第七世至誠院一悟（兼海 一六六八―一七五四 八七歳没）であり、彼

は、その翌享保八年（一七二三）に五五歳で隠退して、その後、本山の職分に従事している。従って息男の清涼院真悟（兼性 一六九一―一七六八 七八歳没）が、第八世を継ぐことになったのである。

そして、翌享保九年（一七二四）から享保十一年の三年間にかけて空恵は、願得寺に出向して講義を重ねている。即ち享保九年六月に『高僧和讃』を、十年には『大無量寿経』と『安樂集』を講義している。この折り『願得寺記』一卷も著述している。更に十一年三月晦日より『正像末和讃』を七座講義している。従って、この願得寺での四回の講義を、一悟とその息男真悟の親子が聴講していたと見做されるのである。また、空恵は、享保十九年（一七三四）七月には、『瑞泉寺・本泉寺・願得寺系図』なるものを作成していることから、願得寺開基の実悟（兼俊 一四九二―一五八四 九三歳没）にも関心を持っていたと見受けられるのである。

しかし、一悟、真悟の親子が相伝家の人であったかということには、現在の相伝関係の資料からは、その記録を見い出すことができないのである。

### 五 教行寺との関係

空恵は、享保十三年（一七二八）二月一日より三月五日まで『浄土論註』を教行寺で講義している。その時、教行寺には、第八世智量院真誓（性静 一七一〇―一七二八 一九歳没）が住職を務めていたが、講義

をした一ヶ月余り後の四月十三日に示寂してしまつた。それで、長福寺の諦住院真円（後の従如）を教行寺に入寺させて第九世を継がせた。しかし、延享元年（一七四四）に真如上人が遷化したのに続き新門主融如上人も示寂したので、真円が東本願寺に入り第十八世従如上人となつた。そのため大恩寺にいた性澄（恵光寺）が教行寺第十世真芸と改号して入寺することになつたのである。

所で、真誓が相伝家の一人であつたかどうかは分からないが、真円（従如）、真芸は前述したように相伝家の人達であつたことは確かである。

## 六 大通寺との関係

長浜の大通寺は、相伝家寺院ではないが、それに準ずる寺でもある。

空恵は、享保十五年（一七三〇）九月十九日に『浄土和讃』を六座講義している。その時の住職は、第四世超絶院海徳（一応 一六八四―一七五六 七三歳没）であり、一如上人の五男にあたる人である。一如上人は、父常如上人より相伝（直伝又は的伝ともいう）を授与されているが、この海徳についてはよく分からないのである。

## 七 興禅寺との関係

所で、空恵は、興味深い一文を享保二十年（一七三五）三月に書き残している。（『真宗全書』巻七「雑文集」p9）

蓮如上人末子。権律師兼智法諱実従和尚は、永禄第七 六月一日。河州枚方庄に於て入寂。寿算六十七歳也。其の遺跡順興寺と号す。然るに中古、彼の寺を洛陽に移す。それより其の跡は、荆莽けいぼうの場と成す。粵えつに釈慶秀、本庄の命を奉つて、彼の舊跡の麓に一仏場を建て、本寺の通院と為す。これに因よつて当寺山上に実従和尚の墳墓有り。近年改葬せい令せむ。遺骨を山下に移す。貴房が彼の和尚の血脈と為すに就いて、追慕の思い少なからず。仍つて其の誠志を感じて、御骨を分与せ令せむるもの也。

河州枚方願生坊

享保二十歳乙卯春三月 釈

城州伏見興禅寺

覚恵公

この一文を仮りに『実従和尚遺跡記』と名づけておく。そこで、この一文とは、どういう性格のものかというに、推測の域を出ないのだが、興禅寺覚恵が、自分は実従の子孫であるから、その遺骨の分与を願生坊某に申し出たので、願生坊では、実従遺骨の因縁について、故実に詳しく空恵にその代筆を依頼し、空恵は、その物語を記して、依頼主の名前（釈——）だけ空けて渡した。そしてその時の空恵の控えがこの一文と思われるのである。

いま、この順興寺実従（一四九八―一五六四 六七歳没）は、相伝家

の一人で、本願寺第十一世顕如上人への相伝（返伝）役を司どった相伝家における重要人物である。

以上が、空恵と相伝家（人）並びに相伝家寺院（家柄）との関係である。ただし、空恵の教学そのものが、相伝義書の影響を色濃く受けていたかどうかは、今後の研究が待たれる次第である。いづれにせよ、空恵と相伝家の人たちとの関係は、彼の生涯を通して密接的な関係であったことだけは否定できないであろう。

また、空恵が生きた時代中には、相伝家側から、相伝家と目される人々が数多くいたことを付記しておくこととする。それは、本法寺教暎、長覚寺いさまらう、南溟寺なめい樹心、願入寺如晴（以上が学寮系である）、光善寺寂玄、一玄、真玄、大信寺真覚など（以上が相伝系である）、そして、常如、一如、真如、従如上人など（相伝系本家）である。

#### 第四節 空恵の『聖教目録』一巻の概説

##### 第一項 撰述年時とその意趣

空恵は、本の表紙に「聖教目録」とその題号を掲げて目録一巻を撰述

しているのである。また、撰述年時については、目録の第三編の末尾と第四編の終りとの二ヶ所に、撰述年号と撰号が記載されている。第三編末尾には、

正徳二年壬辰年

六月二五日改之

西方寺

権律師空恵

第四編の終りには、

正徳二年六月二五日書之

西方寺釈空恵

これによって、正徳二年（一七二二）六月二五日に撰述したことが知られる。それは、空恵が五二歳の時である。

次に、撰述意趣だが、前年の正徳元年に養父空閑が七一歳で没することによって、空恵は、西方寺の寺務はじめ宝物や書籍類の全権を相続することとなり、特に書籍類に関しては目録を作成してその管理に心がけたと考えられる。そして、この目録の見開き右端下に、

城州府見金松西方寺什物

とあることから、この一巻は、西方寺の備え付け用として撰述されたことが知られる。従って、この目録一巻は、当時の学寮に対して公開する目的で作成されたものではなく、あくまで私的な寺の蔵書目録的用途のために記したものであると言えよう。

## 第二項 「聖教目録」の編成

この「聖教目録」の編成形態は、四編の目録が一冊に綴られて編成されているのである。

第一編目録 「西方寺十一世専修坊釈空閑聖教書写部類」

第二編目録 空恵撰述目録

第三編目録 「西方寺安置印判書籍目録」

第四編目録 外典蔵書目録

この四編ともに空恵の直筆によって出来上がっていることで、空恵の「聖教目録」一卷は全て彼の撰述ということができる。所が、一般の諸目録などの紹介で、目録の第一編目録を空閑撰述と記載されているものがあり、それは誤りであることを明記しておく。

次に、各編の目録の概要を述べると、第一編目録は、空閑の書写した書籍類の目録である。第二編目録は、空恵が撰述した書籍類の目録である。第三編目録は、仏教書籍類（内典）の蔵書目録である。第四編目録は、一般書籍類（外典）の目録である。

また、各四編の形式は、それぞれ別々の構成で目録編集がなされている。第一編は、前半部が著作者別に書物名が列記されており、後半部は、大体が種目別に群となつて列記されている。第二編は、空恵自撰の著述目録であり、まず浄土三部経の註釈書より始まり、次いで七祖のものか

【相伝義書】相伝家の聖教目録について【】

ら宗祖、歴代祖師の著述の註釈書と次第を踏んで書物名が列挙されている。第三編は、浄土真宗系や浄土教系から通仏教系に及ぶ經典、論釈、伝記等が大略的に区分して列記されている。第四編は、儒書、唐本、小本とその小見出しが付けられて各群ごとに列記されている。

従つて、この空恵の「聖教目録」一卷は、各形式態の別々の目録を一巻に編成して出来上がっていると言ふことができるのである。

## 第三項 後半の加筆と書入れについて

この「聖教目録」一卷は、一応、正徳二年の六月二五日に完成したと見受けられる。所が、撰述者の空恵は、後年この目録に加筆を施こしている形跡がある。それは、第一編と第二編並びに第三編とにみられ、特に第二編は、全体が後年の加筆書入れによって成立していると推測されるのである。例えば、一般的に、自分の著述目録をその撰述継続途中の時期に作成することは、無理なことである。従つて、とある時期ごとに加筆していく、晩年に及んで目録が完成されるべきものであらう。

それ故、この第二編の目録も、書体が途中で変つている点などから、最初の「書入れ」の後に、ある時期に再度、自撰の著述名を加筆させたと思われる節がある。

所で、「書入れ」という表現をとつたのは、この正徳二年の年号をもつた「聖教目録」は、最初の撰述の折りには、第一編、第三編、第四編の

三編の目録によって編成されていたとみられ、そして、第二編はというと、後年の「書入れ」によって成立したと推測されるからである。いま、その理由を二、三あげて論証してみよう。

一、まづ、第二編に列挙されてある空恵自撰の書物名は、その書物の奥付などから、その大半がこの目録の撰述年時、即ち正徳二年以降のものであり、よって目録作成時には存在していなかったということができ

る。  
二、右の反論として、この第二編は、正徳二年の時点では他の三編の目録と同時に成立しており、筆跡の異なる後半部分のみ、自撰の書物名を後年になって更に加筆したものであり、正徳二年といえ、空恵は五二歳に及んでおり、前半部は既にその著述の草稿本が完成していた時期であるから、予め第二編として自撰の書物名を列挙したものであると主張することが出来る。

三、その主張は、ある程度認められるといえよう。なぜならば、第二編の前半部の書物名の奥付けによる撰述年時が、正徳二年より十年以内に集中しており、奥付けは、正徳二年以前の草稿本から清書した折りの年時を記入したために、正徳二年以降となっただけであるとも考えられる。

しかし、概略的に見てそういう主張は成り立つかもしれないが、実際に前半部の書物類の一々についての奥書や奥付けの撰述意趣を検討していくと、その推論も影を薄くせざるを得ないのである。

例えば、第二編の冒頭に掲げられる「無量寿経綱維鈔」三巻は、その奥書によると、養父空閑の没後（正徳元年）に、師匠玄誓の「無量寿経」の註釈文を空閑の所持置より発見して、それを指南書として「綱維鈔」を撰述したとあるし、又、前半部の最後の「和讃秘決」八巻の奥書にも同様の内容が記されており、そしてその撰述年時も、正徳二年以降と断定されるのである。更に、第八番目に列挙されている「式歎徳称揚鈔」三巻には、正徳四年（一七一四）に大信寺の常智の命を承けて、その年の七月に撰述を完成しているのである。よって、これらの点から考えると、第二編の成立年時は、正徳二年以降とならざるを得ないのである。

四、第二編全体が、後年の「書入れ」という論者の指摘は、又、別の理由によるのである。それは、第二編のみが、他の三編と比較するとどこか異様な状態で記述がなされているという点である。

① まづ第一に他の三編には、全て内題或いは小見出しが置かれているにもかかわらず、この第二編には何もなく、ただ初頭の書物名の下に「西方寺空恵撰」とだけ記されているのである。

② 次に、第二編自体が、非常に窮屈な状態で書かれていることである。

③ 空恵の自撰は、七十部に及んでいるのに、第二編は、総書物類がわずかに二一部だけ列挙して、「改悔秘決」一巻と記して止まっているのである。

④ 第二編が、第一編と第三編との間の紙面の余白を利用してそこに



挿入されたような格好となっており、しかも第二編の終りから次頁がすぐさま第三編として始まっている点など、その不自然さがぬぐい切れないのである。因みに第三編と第四編との間には、余白が二頁あり、その形式からすれば、第一編と第二編との間にも少なくとも余白二頁以上があったと考えられるのである。

⑤ 第一編と第三編や第四編とは、その筆圧も、書物列記の間隔も、また右肩上がりの書体も非常によく似ているが、第二編のみは、その全てが違っているのである。

以上、一から四の論証及び考察した点から総合的に判断すると、第二編の空恵撰述目録は、この目録作成の当初、即ち正徳二年にはなかったものを、後年に及んで第一編と第三編との中間余白部分を利用して「書入れ、加筆」したものであると結論づけることが出来るのである。

更に第二編の目録の撰述年時を推定するならば、第二編の前半部の書物類の奥付け年時から、享保七年（一七二二）頃と思われる。つまり、初期の目録作成より十年後頃に、更に自撰の著述目録一部を加えて「聖教目録」としたとみられるのである。そして、後半部の加筆の年時については、その列挙された書物類の奥付け年時から、「存覚上人伝」二巻が、最も後年の享保二十年（一七三五）二月に撰述されている点から、その年以降、即ち七五歳以後の加筆と断定することが出来よう。つまり、前半部の書き入れより十三年後に、更に後半部の十一部を加筆したという

ことになるのである。

最後に、第二編の書入れ、加筆は、空恵とは別人の筆跡ではとの疑いも出ようが、論者の見解としては、空恵の直筆と認定しておきたいと思うのである。

## 第五節 空恵の『聖教目録』一巻

### 第一項 『西方寺第十一世専修坊积空闲聖教書写部類』 (第一編目録)

#### 一 第一編目録の構成について

この第一編目録は、養父空闲が没したので、空闲が生涯に涉って書写した書物類を、空恵が整理して目録として撰述したものである。そして、その目録の構成は、次の如くなっている。

まづ、この目録の構成は、本文上では区別されていないが、前半部と後半部とによってその書物類の分類の仕方が相違っていて、前半部は、著作者別に書物群が列記されているが、後半部は、種目別に書物群が整理されて列記されているのである。

そして、前半部は、宗祖を特に重じて親鸞聖人の著述群を冒頭に掲げて記し、続いて元祖法然上人の著述群と世代を繰り上げて記し、次いで聖覚法印、隆寛律師へと次第させて著述群が記されている。そして次には、真宗系の第二世如信上人の著述群とその世代を引き戻して記し、以下次第させて覚如上人、存覚上人、従覚上人、存如上人、蓮如上人と歴代祖師のそれぞれの著述群を記しているのである。

後半部は、『信一念御筆記』一卷（作者不詳）からが後半部と見られ、最初の書物群は、一応、真宗系の初期のものとおぼしき書物類が混交して列記されているが、そこには、その書籍の著作者選定に、空恵が多少苦勞していた様子が窺われるのである。

そして、次の群は、『変古裏』一卷からで、各師の伝記群を中心に列記されてあるが、又それ以外の種目の書籍も多少入り混じっているのである。

次の群は、『弥陀経義集』一卷からで、教義群の書物類が列記されていて、『聖教拔書』一卷で一旦締め括られている。

その後の『善患上人法語』一卷からは、種目混合で書物類の列記があり、『破邪問答』三巻で締め括られている。そして、『摧驗抄』一卷からまた種目混合で列記されて『葬礼記』一卷で締め括られている。

次の群は、『絵像木像記録』一卷からで、古記録の書物群が列記されて『続無名抄』一卷で終わっている。

次の『正信偈私書入』一卷からは、正信偈、和讃の註釈群で一括して書物類が列記されている。

次の群は、『真宗聖跡集』一卷からで、二四輩伝の書物類が列記されて、『越前三門徒法脈』一卷で締め括られている。

次は、二部だけ經典群が列記され、次いで一部だけ『和論語』十巻が挙げられている。

次の群の『難波戦記』六巻からは、武家記群の書物類が列記されている。そして途中からは、紀行群の書物類が列記されて、終り部分は、雑書籍が列記されて『天王寺年中行事』一卷で締め括られている。

最後段の二部は、前述の筆跡と少々違っているのを、「都合二百三十九部」と既に総部数を計算した後に記載されている点から、後日ないし後年に空閑の書写本が出て来たので加筆したものであると見做されるのである。

## 二 書物類の部数について

### (前半部)

### (部数)

- |               |    |
|---------------|----|
| 1 親鸞聖人製作…………… | 七部 |
| 2 源空聖人製作…………… | 六部 |
| 3 聖覚法印作……………  | 二部 |
| 4 隆覚律師作……………  | 二部 |
| 5 如信上人作……………  | 五部 |

6	覚如上人作	二四部
7	存覚上人作	二四部
8	従覚上人作	一部
9	存如上人作	一部
10	蓮如上人作	六部
(前半部合計 七八部)		
11	一段群	四七部
(後半部)		
12	二段群	二五部
13	三段群	三十部
14	四段群 (古記録群)	六部
15	五段群 (正信偈・和讃群)	十一部
16	六段群 (二四輩群)	六部
(四段群〜六段群合計 二三部)		
17	七段群	◎ 三部
(後半部合計 一五五部)		
(総合計書物部数 二二三部)		
18	追加群	◎ 二部

この第一編目録の書物類の総合計部数は、以上右表からみると、二三三部という多量な部数が列記されてある。

また、本文記載中の合計数と右表の①、②、③、④の四ヶ所の各合計数とが相違しているのである。即ち、①の合計数では、本文中は「聖教拔書」一巻の後に「已上一百二四部」とあり、②の合計数は、本文中は「越前三門徒法脈」一巻の後に「已上一二二部」となっていて、③では「已上二三部」とあり、更に④では「都合二百三十九部」となっているのである。

まづ、①、②との相違については、空恵がこの目録の書物名を書き終えた時点で、途中の小合計を記載するために部数を計算したのである。所が、計算をする時、書物名を一々に数えてゆけばよかつたのであるが、中段にある巻数記載のヶ所を目で追って部数を数えたとみられるのである。つまり、①では、本文記載数は「已上一百二四部」となっていて、実際の数②は、一二五部である。それは、「雑記」の所に巻数の記載がないためにこの一部を落して計算したことで一部少なくなったと考えられる。次に③についても同様で、「天梯」の所に巻数記載がないため、実数では二三部あるのを「已上二三部」と一部少なく計算したものとと思われるのである。

次に、④、⑤との相違については、④は、本文記載数は「已上二三部」となっているが、実数は二三部しかない。空恵は十の位いをひと桁間違えて二三部のところを三三三と記したのである。⑤の相違では、彼は、

自分で計算して記載した途中の小合計を信頼して、その小合計を合算して「都合二百三十九部」と記したのである。その彼の合計算には誤りがないのだが、実際の書物列記部数は二三一部（追加二部を除く）であり、その差が八部となるのである。しかも空恵自身が途中なか㉞、㉟で各一部合計二部を読み落してきているので、論者の計算上から二部を差し引くと二二九部でその差が十部となり、また空恵が最後の段の小合計で十部多く数えたので、空恵の総合計二二九部より十部を差し引くと二二九部となり、論者の二二一部より二部引いた数と合致するのである。簡単にいえば、空恵は二部落して十部お目に数えたので、空恵の総合計が実数より八部多くなっただけのことなのである。

以上、この第一編目録は、その総部数二二三部に涉っているのであるが、それを全部、空閑一人が書写したというわけである。巻数でいけば目算として三三〇巻余りに及び、それを書写するために費やされた年月や労力を思う時、末学の一人として、ただ感服させられるのみである。またこれだけの書籍類を一体どこで書写したのであろうか、どのように入手して写したのであろうか。それ、恐らくは、所蔵の寺々を一軒ごと回って一巻づつ根気よく写し取っていったことと想像されるのである。更に、これら空閑の書写した書籍部類が、そのまま西方寺に現存しているかどうかは、日下無倫氏は何も述べられてはいないのである。

### 三 第一編目録と他の聖教目録との関係

この第一編目録と、既にこの目録成立以前に撰述された他の目録との関係については、

まづ第一には、親鸞の著述部を師法然の著述部よりも前に掲載したものととしては、存覚、実悟、一雄、寂玄などの撰述目録ではその例がなく、空恵独特の目録構想によるものと言える。

所で、親鸞著述部を冒頭に掲げる形態は、よ空恵の「仮名聖教目録」一巻には見られるのだが、よ空恵の撰述年時が明確になっていないので、よ空恵の撰述年時は一七二二年でよ空恵の刊行年時は一七一七年となっている）どちらが先か判定しかねる面がある。また、書物名の列記の仕方は、親鸞著述部や覚如著述部では、非常に酷似した所があり、どちらかが先に撰述された目録を参照したことは確かだとも言える。

また、著述者別に書物名を列記する仕方は、存覚の「浄典目録」にその基本の形式があるが、実際に手本としたのは、一雄の「真宗正依典籍集」一巻であると見受けられる。なぜかと言えば、存覚著述類の「持名抄」・「真要抄」・「諸神本懐集」・「破邪顕正抄」の四部を「是ヲ四部九帖ト云也」という言い方は、いまだ存覚の目録上にはなく、一雄の目録から始まるからである。それで、空恵がいまこの第一編の目録を作成するにあたり、一雄の目録を参照はしたが、それも前半部のみのものであり、後半部は、別に空恵独自の目録構想で作成していったとみられるのである。

る。

所で、空恵は、願得寺で七回もの講義をして、「願得寺記」や「瑞泉寺・本泉寺・願得寺系図」を撰述しているが、この第一編目録及び、「聖教目録」一巻に涉つては、実悟撰述の「聖教目録問書」一巻の影響は、ほとんど受けていないといつてよい。更にその目録名すら空恵の目録には記載されてもいないのである。

また、この空恵の「聖教目録」一巻は、西方寺の藏書目録という性格から、そこには教学的な意図や内容が含まれていないと見るべきであり、従つたとい他の聖教目録の影響を受けていたとしても、それらの系統に属するものではないと言えるのである。

## 第二項 西方寺空恵撰述目録(第二編目録)

### 一 第二編目録の構成について

第二編目録は、この「聖教目録」一巻の撰述者自身の著述目録である。そして、その目録の構成は、一雄の目録の構成形態を踏襲して、一、浄土三部經、二、七祖論釈、三、宗祖著述、四、歴代祖師の順に、自撰の書物名が列挙されてある。このように自らの註釈書を配列することが出来るのは、勿論註釈書の多くを撰述する必要もあるが、更には、高年齢に至らなければ出来ないこともある。従つて、この第二編の目録の

「相伝義書」相伝家の聖教目録について〔〕

撰述年時は、他の三部より久しく遅れてのことであると窺われるのである。

### 二 書物類の部数について

この第二編目録の書物類の部数は、他の三編と比べると非常に数が少ないといえる。実際に空恵は、七十部に及ぶ撰述物がありながら、ここに掲載したのはそのうちの三割弱である。その理由については、よく分からないのが正直なところである。恐らく空恵自身は、自分の撰述目録などというものを作成する気などもとからなく、たまたま第一編と第三編との間に余白があつたことから、そこに自撰の書物名を經・論・釈と次第に配して列挙したと思われるのである。

それでは、この目録の書物部数について整理すると。

- |               |    |
|---------------|----|
| 1、三經の註釈部      | 四部 |
| 2、七祖の註釈部      | 三部 |
| 3、儀式依用聖教類の註釈部 | 三部 |
| 4、親鸞聖人著述及び伝記部 | 四部 |
| 5、歴代祖師の伝記部    | 三部 |
| 6、故実・系図部      | 二部 |
| 7、蓮如上人著述類の註釈部 | 二部 |

(総合計書物部数 一一二部)

この目録の書物名列挙の部数は、二一部であり、それは、一応の体裁を整えるために、一定の部数を記述したにすぎないものと言える。

また、空恵の自叙伝の中にも自撰の書籍名を掲げているので、いまそれを引文して、この目録の参照として置く。(『統真宗大系』第十一卷 p 44)

貞享元秋九月六日 空晴法師（尊勝坊トキハラス）の譲りを受けて、城南伏見縣西方寺に寓す。爾より志願を發して、浄土七部聖典を甄けん究せんと念う。

先づ、善導の「觀經義」に就いて、「商量鈔」を撰じ、二十卷有り。

次に、「選摂集商量」十卷（内分三卷）又「無量寿經綱維」（内分三卷）一卷 同經「典

覽鈔」十三卷。此の典に恭うやまつしく芝山從三位參議 藤原広豊卿の冠

序を賜わり、寔まことに一世の大幸也。次に、「弥陀經弁義」三卷。又「浄

土論註風航鈔」九卷。「安樂集扶輪鈔」六卷（内分三卷）又「愚禿鈔試解」

五卷（内分三卷）「浄土文類管解」五卷。「報恩講式歎德鈔」三卷。「正信

偈和讀秘決鈔」十卷。「祖師略伝」、「改悔秘決」。

とあり、第二編目録中には、この自叙伝で掲げる書物類の十三部のうち、多少題名を異にはしているがその殆んどが列挙されている。ただ、「弥陀經弁義」三卷の一部が、第二編目録中の「弥陀經しん參要」三卷と同一か否かは、現在のところ判明していないが、多分、同本異名の可能性も強いと思われるのである。

### 第三項 「西方寺安置印判書籍目録」(第三編目録)

#### 一 第三編目録の性格について

この第三編目録は、その内題が示す如く、「西方寺安置印判書籍目録」とあり、西方寺に旧来より所蔵されている書籍類の目録である。そして、空恵が、「正徳壬辰年 六月二十五日改之」と記すように、以前からあった目録をこの時に書き改めたものであることが知られる。そこで、従前の目録は誰れが作成したのかということであるが、それはいまは分からない。空恵自身が以前に撰述したものをこの正徳二年に書き改めたとも言えるが、養父空閑が存命中には、西方寺に関するものは自由に出来なかつたと見受けられる点から、空恵自身ではないと言えよう。

逆に空恵が、自分の代になつたので、所蔵の書籍類を再度点検し直し、自分の持参した書籍も含めて新たに書き改めたと考えた方が自然である。そうなると先代の空閑の可能性が高くなるが、明確な証拠があるわけでないからして、推定として空閑撰述の目録が、この第三編目録の書かれる以前にあったとしておくこととする。

#### 二 書物類の部数について

この目録は、ある程度の部分では同系の書物類が集められて列記され

てはいるが、そこには他に各種の書籍類も数多く混交されている点から、いま種目別な群でもって分類することは不可能に近いと言える。

さて、書物類の総部数は、二〇八部であり、そのうち最後の二部のみが、前述の筆跡と違っていることから、後日の加筆と見做されるのである。従って、正徳二年の時のこの目録の総部数は二〇六部である、ということになる。そこで加筆の時期についてであるが、第二編目録の後半部の加筆の筆跡と酷似していることから、一七三五年（七五歳）以降と推定される。

また、目録の本文記載に示せる部数から総部数を計算すると、合計二一五部となるのである。

### 三 書籍類の種目について

第三編目録の中の書籍類は、その大半が仏教典籍で占められていて、中でも經典類についてはわずか十一部（本文指示の部数は十三部）にすぎず、あとの殆んどが註釈書類である。しかも浄土系の註釈部がその大勢を占めているといえる。

また、この目録の筆頭に掲げる「三部図経」二部八巻は、目録本文の下註に、

内一部 佐州長善寺了賢太愛 遺物也

とあり、空恵の実父了賢太愛より相承の經典一部がそこに含まれていることを示している。その意味から推するに、実父への恩愛の情の厚きも

のを見ることができるのである。

### 第四項 西方寺蔵書外典目録（第四編目録）

#### 一 第四編目録の構成について

第四編目録には、内題が置かれていないが、しかし、それは、西方寺に旧蔵している仏教典籍以外の書籍類を整理して作成された目録ということが出来る。

そして、その目録の構成は、書籍類を三群に分類して、そこに小見出しを付けて書物名を列記する形態がとられている。その小見出しの群とは、一、儒書、二、唐本、三、小本の三群である。

しかし、その小見出しの題とそこに入っている書籍とは必ずしも一致しておらず、例えば、一の儒書群では、儒書は最初から一頁半位いで、あとは、漢詩や風土記、物語、神道書など雑種なものも加わっていて、実際は混交群となっている。又、二の唐本群、三の小本群も、その小見出しの題自体が、その群の書籍内容を限定する程の意味も持っておらず、従ってそれは、単なる目安的に付けられたものようである。

よって、この目録は、他の聖教目録との関係もなく、空恵の独自の形態でもって作成されていると見ることが出来るのである。

## 二 目録の部数について

この第四編目録の中の書物類の部数であるが、

- 一、儒書群……………一〇五部
- 二、唐本群……………一二部
- 三、小本群……………四四部

(総合計書物部数 一六一部)

となり、総合計の書物部数は、一六一部である。また目録本文中の部数表示によって計算すると、小本群が四八部となり、総合計は一六五部となるのである。

## 第五項 「聖教目録」 一巻の略説

以上、空恵が撰述した『聖教目録』一巻(合四編目録)について考察をしてきたが、各項で述べたように、この目録は、西方寺の蔵書目録といった性格が強いと言える。そして、既存の聖教目録からの影響は若干受けつつも、目録撰述の意趣が蔵書の目的的な範囲にとどまっている面からして、その後の聖教目録の撰者に与えた影響も実に乏しいものと見られる。しかし、今日よりすれば、一七〇〇年代初期に作成された目録という意味では、その資料的価値は大変高いと言うことができよう。例えば、初期学匠らの著述書など、現在その書名や存在すらが不明となっ

ているものでも、この目録によって書名や存在が確認されたりして、伝聞の証左を与えてくれたりすることもあるからである。

また、この『聖教目録』一巻が、第一編、第二編、第三編、第四編とそれぞれ性格の異なった目録の編成体であることから、各分野の方面に多大な影響を与えることが出来るのである。なにしろこの『聖教目録』一巻は机上での目録作りの為の目録ではなく、蔵書という現物を前にしての目録作成である故に、その実証性は、他の聖教目録を寄せつけない強みがあると言える。

更には、この目録上で列記した書物部数は、第一編目録では、二二三部であり、第二編目録では、二二一部であり、第三編目録では、二〇八部(本文中部数表示計算二二五部)であり、第四編目録では、一六一部(本文中部数表示計算一六五部)であり、総合計の書物名列記部数は、なんと六二三部(本文中部数表示計算では六三四部)に及ぶほう大な数量となるのである。数字はともあれ、その数量の書籍類を江戸時代中葉期に所蔵していたという点でさえ驚異に値いするものである。従って、当時、空恵は、学寮の間でも所蔵典籍の多いことでその名が通っていたと伝えられていることも、頷づかれる話である。

最後に、『相伝義書』の聖教目録の立場から、この空恵の『聖教目録』一巻を見た時、その構成や意図に対しては余り評価に値するものではないが、目録中に記載の二々の書物名に関して、中には『相伝義書』にもその示唆を与えるに十分な書籍類も数多く含まれていることから、こ



の『聖教目録』一巻の存在価値を全く認めないわけにもいかないのである。

## 結 び

上来、玄誓・空閑・空恵の三師の事跡や『聖教目録』一巻について触れてきたのであるが、玄誓については多少その経歴や事跡が知られるのだが、まだまだ不十分な面がある。また、玄誓の『聖教目録』作成に關しては、全くその手がかりすらないのである。次いで、空閑の事跡については、ほとんど分らないという状態で、逆に不思議な気がする。総数二三部もの書籍を書写した人物にしては、その学匠としての事跡が全く記録に残っていないのは、一体どうしてなのであるうかとその学匠性までも疑いたくなる始末である。空恵については、彼の著述書の奥書などからその事跡が読み取られることで、大部明らかにすることが出来たと思う。しかし、彼の三十代から四十代の間は妙にその事跡が少なく、五十代以降は逆にその事跡が多いという面白い現象があることも謎の一つとして残る。それと、彼の学寮での立場や地位などが、いま一つ明らかでないことと、空恵の学説がいかなるものであったかが、研究不足で明確にできなかったことである。

また、『聖教目録』一巻については、『相伝義書』の聖教目録との關係

【相伝義書】相伝家の聖教目録について【】

はほとんどないと言えるのである。

所で、今回、図らずも玄誓、空閑、空恵の三師を取り挙げたのは、玄誓を語る時、そこに必然的に空閑、空恵が登場し、空閑を記す時は、玄誓、空恵を抜きにしては出来ず、また空恵を論ずる時は、おのづと玄誓、空閑が現われてくることから、この三師は、一連のものであるため、最終的には空恵の『聖教目録』一巻の研究に及ぶのであっても、どうしてもその前哨として玄誓、空閑二師を論ずる必要性がそこにあったのである。

また、空恵は、父了賢に似て漢籍にも通達していたようで、彼は著述の中で特異な漢字を使用していたため、論者はその解説に大変な時間と労力を費やす破目に陥ったことで、不学なものにとっては、骨の折れる人物でもあったのである。

空恵の聖教目録

〈凡例〉

- 一、底本は、大谷大学図書館蔵の空恵『聖教目録』一巻である。
- 二、翻刻は、右同図書館協力に依る。
- 三、底本の漢字は、出来る限り通行本に直した。
- 四、略字は、元の字に復元した。
- 五、誤字は、訂正して表記した。
- 六、本文や下註は、原文に似せて配置した。
- 七、底本は、原典研究資料として後に写真掲載した。

空恵の『聖教目録』

(題号) 聖教目録

城州俯見金松西方寺什物

西方寺十一世専修坊积空閑聖教書写部類

親鸞聖人制作

一 教行信証

八卷

一 尊号真像銘文

一卷

一 唯信鈔文意

一卷

一 一念多念文意

一卷

一 三経往生文類

一卷

一 専修念仏問答抄

一卷

○ 一 皇太子奉讃

一卷

源空聖人制作

一 選択集

二卷

一 本願相應集

一卷

一 念仏得失義

一卷

語灯録了恵ノ奥書ニ云ク世ノ中ニ黒谷ノ御作トテ文多シイハユル

決定往生行業抄 本願相應抄 安心起行作業抄 九条ノ北ノ

政所へ進スル御返事此文トモハ餘ノ和語ノ書ニ文章モ似ス義

勢モ違ヘリ大キニ疑ヒアルウヘニ古キ人偽書ト申伝ヘタリ又念仏

得失義ト云文アリ聖人ノ御作ト云ヘリ然ドモ是ハ正シクアラヌ人ノ

ツクレル文也已上但シ用否学者ノ意樂ニヨルアナカチニ了恵ノ

コトハニナツムヘカラス

一 念仏往生要義抄

一卷

一 一枚起請一枚起請

一卷

一	故上人法語	一卷
一	聖覺法印作	
一	唯信鈔	一卷
一	後世物語	一卷
一	隆寛律師作	
一	一念多念分別	一卷
○	自力他力之事	一卷
○	如信上人作	
○	他力信心聞書	二卷
○	還相廻向聞書	一卷
○	唯信抄義	一卷
一	選要抄	一卷
一	選撰肝要抄	一卷
一	覺如上人作	或云存覚作
一	最要抄	一卷
一	真宗用意	一卷
一	願々抄	一卷
一	浄土文類集	一卷
一	肝要記	一卷
一	纒解記	一卷
	存覚作	

一	本願抄	一卷
一	因果抄	一卷
一	真宗意得抄	一卷
一	浄土見聞集	一卷
一	末灯抄	二卷
一	拾遺古徳伝	全部九卷
一	口伝抄	三卷
一	改邪抄	一卷
一	執持抄	一卷
一	御伝抄	二卷
一	報恩講式	一卷
一	両師講式	一卷
一	知恩講式	一卷
一	十四行偈聞書	一卷
一	歎異抄	一卷
一	安心決定抄	二卷
一	選要抄	一卷

御消息集	一卷	
存覚上人作		
持名抄	二卷	六要鈔
真要抄	二卷	
諸神本懷集	二卷	
破邪顯正抄	三卷	
是ヲ四部九帖ト云也		
女人往生聞書	一卷	
歩船抄	二卷	
決智抄	二卷	
法華問答	二卷	
真宗血脈伝来抄	一卷	
三信三心同一之事	一卷	
報恩記	一卷	
至道抄	一卷	
弁述名体集	一卷	
顯名抄	二卷	
法語	一卷	
撰釈注解抄	五卷	
浄土真宗聞書	二卷	
<small>或云性信房作</small>		

嘆徳	一軸	
錦織寺縁起	一卷	
常楽台一期記	一卷	嘆徳文意
毘沙門講式	一卷	浄典目錄
從覚上人作		一卷
慕婦絵詞	十卷	
存如上人作		
秘伝	一卷	
蓮如上人作		
御文	五帖	
外御文	三卷	
正信偈大意	一卷	
持要集	一卷	
教行信証題抄	一卷	
本願成就聞書	一卷	
信一念御筆記	一卷	
婦命尽	一卷	
教化集	一卷	
最須敬重絵詞	七卷	<small>但三四 關本</small> 乘專法眼作
浄土真宗聞書	一卷	<small>存覚作 或云性信房作</small>

○	安心義	二卷	作者不知
○	教化集	一卷	誓海
—	安心略要抄	一卷	存覚作
—	自要集	一卷	覚如上人作 <small>高田テハ第五世定尊ノ作ト云</small>
—	雜記		<small>蓮如上人法語 隨聞書 女人般若集 眞宗正意集 但シ上中下ノ内中巻不足</small>
○	還愚頭真抄	一卷	
○	自力他力事	一卷	隆寛作
○	聖道浄土名目	一卷	
○	謝徳抄	一卷	
—	持要抄	一卷	
—	变古裏	一卷	<small>加州山田 光闍坊頭誓作</small>
—	蓮如上人御物語	一卷	実悟之記
—	蓮如上人御一代記	一卷	
○	野村記	一卷	御弟子衆連判記 <small>又山科記ト云</small>
○	親鸞上人血脉文集	一卷	
—	親鸞上人御因縁	一卷	
—	眞仏因縁	一卷	
—	源海之事	一卷	
—	蓮如上人遺徳記	一卷	実悟撰 蓮悟記

—	明真抄	一卷	存覚作
—	黒谷上人遠流記	二卷	
○	不思議問答	一卷	
○	女人教化抄	一卷	
—	十王讚嘆	一卷	
○	帰命本願抄	一卷	
—	釈尊出家伝記	一卷	
—	大仏供養物語	一卷	
—	為盛発心集	一卷	
—	平太郎縁起	一卷	
○	弥陀因行記	一卷	
—	弥陀経義集	一卷	
—	一言法談	一卷	
○	実悟筆記	一卷	
○	念仏明要抄	一卷	
○	万法蔵	一卷	
○	浄土法門見聞集	一卷	
○	眞宗教要抄	一卷	
○	眞宗要語	一卷	
○	三身六義	一卷	

- 一 五重大意抄 一卷 存覚作
- 一 安心大要抄 一卷 隆堯作
- 聖教拔書 一卷

已上一百二四部

已上十五部

- 善患上人法語 一卷
- 鎮勤用心 一卷
- 三心出要抄 一卷 西山義抄也
- 三部仮名抄 七卷
- 称讚經 一卷
- 延命地藏經 一卷
- 洗浴經 一卷
- 瑞応刪伝 一卷
- 華嚴五教拔書 一卷
- 心經 並抄 一卷
- 大論拾用 一卷
- 浄土無生論 一卷

- 明心宝鑑 一卷
- 略論 一卷
- 大藏經目錄 一卷
- 大論華 一卷
- 地藏感応伝 一卷
- 無常説記 一卷
- 四座講式 一卷
- 浄土名目聞書 一卷
- 諸經要集拔書 一卷
- 事文類聚拔書 一卷
- 因縁譬喩集成叢 一卷
- 末法灯明記 一卷
- 寺社縁起雜録 一卷
- 本朝四ヶ度宗論記 一卷
- 邪義決虚偽決 一卷
- 翻迷集 二卷
- 七條鏡 一卷 円智作
- 破邪問答 三卷

已上三十部

○	推驗抄	一卷	
○	秘密集	一卷	
—	宗要文	一卷	
—	釈疑抄	一卷	
○	説聴要文	一卷	
○	他力領解抄	一卷	
○	感嘆抄	一卷	
○	譬喩章	一卷	
○	諸仏慈悲集	一卷	
○	浄土諸流	一卷	
○	真宗行事	一卷	
—	論註私觀子	一卷	
○	蓮門宗流	一卷	
—	安心決定抄私記	一卷	慶秀作
—	持名抄私記	一卷	同作
—	興御書抄	一卷	高田惠雲作
—	和讃科考	一卷	円智作
—	報恩講式翼讃	一卷	
○	愚鑑抄	一卷	

「相伝義書」相伝家の聖教目録について〔一〕

—	鼠雀問答	一卷	
—	開疑抄	三卷	
—	用意集	一卷	
—	一枚起請拵海出文	一卷	
—	選択開書	一卷	
—	法然上人御詠歌	一卷	
—	円光大師略伝	一卷	
—	贈円光大師号絵詞	一卷	
○	嘆異抄私記	一卷	円智作
—	一宗行儀抄	一卷	<small>秘事法門抄也</small>
—	葬礼記	一卷	
	已上三十部		
○	繪像木像記録	一卷	<small>秘書也</small>
○	真宗聖跡	一卷	<small>秘書也</small>
○	真宗故実略記	一卷	<small>秘書也</small> 年代少異アリ
○	天梯	一卷	
○	統天梯	一卷	
○	統無名抄	一卷	

○	正信偈私記書入	一卷	
○	和讚私記書入	全部五卷	合三卷
—	正信偈科	一卷	
○	和讚二四首略註	一卷	
○	和讚四十八首聞書	一卷	
○	現世利益和讚大意	一卷	
○	和讚竜甫記	一卷	
○	浄土和讚首書	一転	
○	二一首和讚抄	一卷	惠空作
○	和讚私記追加	一卷	円智述
○	正信外記	四卷	
—	真宗聖跡集	一卷	<small>親鸞上人以來 記録極秘抄也</small>
—	二四輩実悟筆記	一卷	
—	二四輩縁起	一卷	
—	拮聚集	一卷	
—	諸国散在記	一卷	
○	越前三門徒法脈	一卷	

已上二二部

○	大成経正部	又公事本紀	
○	大成経雜部		
—	和論語	十卷	
○	難波戰記	六卷	
○	武家古今滅滅記	二卷	
—	武家法度記	一卷	
—	日本武將略記	一卷	
—	日本書籍考	一卷	
—	犬追物語	一卷	
—	松平開運記	一卷	
—	重宝記粹	一卷	
—	文英苑	一卷	
○	西窓日記	一卷	
—	東武名所記	一卷	
—	見聞花林	一卷	
—	正意記行	一卷	
○	自考録	一卷	
—	鉄槌論	二卷	
—	立花大全	一卷	



一	銘文集	一卷	
一	銘文集記	一卷	
一	雜覺書	一卷	
一	天王寺年中行事	一卷	
	已上三部		
	都合二百三十九部		
一	神国決疑編	一卷	
一	古今人物史	四卷	
一	無量寿經綱維鈔	三卷	西方寺空惠撰
一	無量寿經典覽鈔	十三卷	同
一	善導大師 觀經義商量鈔	二十卷	同
一	弥陀經纂要	三卷	同
一	浄土論註風航鈔	十卷	同
一	安樂集扶輪鈔	六卷	同
一	選択商量鈔	八卷	同
一	式歎徳称揚鈔	三卷	同

「相伝義書」相伝家の聖教目録について(一)

一	正〇偈秘決	二卷	同
一	和讃秘決	八卷	同
一	親鸞聖人略伝	一卷	同
一	愚禿鈔試解	四卷	同
一	浄土文類管解	五卷	同
一	教行信証拾遺	十五卷	同
一	覚如上人伝	二卷	同
一	存覚上人伝	二卷	同
一	蓮如上人伝	二卷	同
一	伏見記	一卷	同
一	祖師御系	三卷	同
一	教行信証題註	一卷	同
一	改悔秘決	一卷	同
一	西方寺安置印判書籍目録		
一	三部図経	二部	八卷
			内一部佐州長善寺了賢太愛遺物也

一	同望西樓	一部	七卷	
一	望西首書	一部	七卷	
一	大經科註		六卷	
一	大經見聞	一部	七卷	
一	大經要註記	一部	八卷	
一	教行証	二部		
一	六要抄	一部	八卷	
一	法華科註	一部	十卷	
一	同北林	一部	十二卷	
一	楞嚴經	一部	十卷	同伝来記
一	金剛經纂要		二卷	
一	金剛經略抄		一卷	
一	小經義疏		一卷	同句解
一	同聞持記		一卷	法界次第
一	同義記	二部	二卷	性理字義
一	同略記		一卷	濟北集
一	同通讀		一卷	名義集
一	同要解		一卷	付法伝
一	同略解		一卷	釈氏要覽
一	同疏抄	二部	八卷	冷斎夜話

一	同管解		八卷	四教義	三卷
一	天台觀經疏		一卷	灯前夜話	二卷
一	心經略抄		一卷	行儀記	七卷
一	同梵字註		一卷	六物抄	三卷
一	同註解		一卷	六物図	一卷
一	同性証註		一卷	竹窓隨筆	三卷
一	十輪經	合五卷		元享釈書	十五卷
一	心地觀經	二卷		三教指帰	二卷
一	于闐盆經新記	二部	合四卷	三宝感応録	一卷
一	同愚聞記		八卷	明眼論	一卷
一	同通今記		二卷	疑問答	一卷
一	同新抄		一卷	浄土四義私	一卷
一	同抄		一卷	統往生伝	一卷
一	同法式		一卷	瑞応刪伝	一卷
一	円覚經略抄	四卷		釈書文弁	一卷
一	觀音經義抄	二卷		日本未來記	一卷
一	心經頭正記	一卷		釈氏二四考	一卷
一	金光明經玄義	一卷		童勸抄	一卷
一	十王經	一卷		遺教經補註	一卷
一	因果經	一卷		愚迷発心集	一卷

一	延命地藏菩薩經	一卷	遊仙窟	一卷
一	善惡占察經	一卷	三智抄	一卷
一	起信論疏	二部 八卷	諸乘法數	一卷
一	同筆削記	六卷	五教章	一卷
一	因明纂解	三卷	日本往生伝	一卷
一	六齊功德經抄	一卷	念珠略詮	一卷
一	聖財論	合一卷		
一	十疑論	一卷	註十疑	一卷
一	迦才浄土論	三卷	枝葉隱逸伝	一卷
一	群疑論	七卷	西谷名目	二卷
一	原人論	一卷	浄土文	三卷
一	同解	三卷	大論抜	二卷
一	同發徴録	一卷	谷響集	十卷
一	同首書	三卷	本朝書籍考	一卷
一	無性論	一卷	無垢子心地	一卷
一	像法決疑經	一卷	臨終要決	一卷
一	恩重經	一卷	念仏得失義	一卷
一	光明真言抄	一卷	雲樓放生文	一卷
一	大藏一覽	十卷	聴雨記	一卷
一	法苑珠林	合	集解新抄	合一

一	浄土疑問	五卷	事書類聚抜	一卷
一	地藏感應伝	二卷	真言名目	一卷
一	帰元直指	二卷	六物首書	一卷
一	不動尊愚抄	一卷	阿字観	一卷
一	天竺往生験記	一卷	止観大意	一卷
一	舍利記	一卷	三界義	一卷
一	日月行道図	一卷	正直集	一卷
一	悉曇愚抄	一卷	卮言抄	一卷
一	新学比丘行儀	一卷	業陰	一卷
一	蔡邕独断	一卷	仏祖三経	二部 二卷
一	禅家亀鑑	一卷	東坡相応志	一卷
一	楽邦文類	五卷	五会讃	二部 四卷
一	十因	一卷	十因私記	三卷
一	論註	二卷	二蔵義	合十
一	同註記	五卷	同見聞	八卷
一	同見聞	五卷	浄土名目	一卷
一	讚弥陀偈記	三卷	同見聞	二卷
一	太子伝	二卷	同私抄	三卷
一	安樂集	二卷	伝通記	十五卷
一	同私記	二卷	糝鈔	十卷

【相伝義書】相伝家の聖教目録について(二)

一	同鑰聞	七卷	玄義鶴記	五卷
一	決疑抄	五卷	直牒	十卷
一	直牒見聞	三卷	選撰直談	五卷
一	選撰義解	五卷	同私抄	五卷
一	同伝	一卷	同口筆	一卷
一	西方要決	一卷	浄土或問	一卷
一	五部要文	一卷	鎮勸用心	一卷
一	往生講式	一卷	邪義決	一卷
一	本願義抄	一卷	鎮勸用心抄	一卷
一	念仏鏡	一卷	論註音尺	一卷
一	往生要集	三卷	要集首書	六卷
一	同註記	八卷	照蒙記	合四
一	遊心安樂道	一卷	不退義	一卷
一	西山上人伝	一卷	西山年譜	一卷
一	本願寺系図	一卷	三部仮名抄	一卷
一	源空遠流記	一卷	破邪問答	一卷
一	円光大師略伝	一卷	安心決定抄私記	二卷
一	興御書抄	一卷	御伝之抄	一卷
一	十八通	一卷	正信科文	一卷
一	同裏書	一卷	勢至円通抄	一卷

一	文類試解	一卷	式翼讚	一卷
一	和讃私記	二部 十卷	正信私記	二部
一	愚禿抄	二卷	法語	一卷
一	正信要解	四卷	真宗教化集	一卷
一	真宗肝要儀	一卷	歎異抄記	一卷
一	西方指南抄	六卷	黒谷絵詞伝	四卷
一	唐本疏抄	四卷	開疑抄	三卷
一	論註拾遺抄	三卷	観経義疑端	三卷
一	疏抄事義問弁疑弁	三卷		
一	大智度論	百卷	外二目錄三卷拔二卷	
一	十住論	十六卷		
	已上			
	正徳二壬辰年			
	六月二五改之			
	西方寺			
	權律師空恵			
	儒書			

一	四書大全	一二卷	五經	十一卷
一	同首書		史記	合五十
一	易集註	十卷	詩經集註	八卷
一	書經集註	十卷	莊子	十卷
一	老子經	二卷	書經通考	七卷
一	同首書	二卷	書經旁通	八卷
一	同抄	三卷	孝經大義	一卷
一	論語古註	二卷	孟子序說	一卷
一	同序說	三卷	蒙永 <small>書首</small>	八卷
一	小学句讀	四卷	古文前集	二卷
一	近思錄	四卷	古文後集	二卷
一	古文抄	十卷	稽古略	五卷
一	同考	一卷	鬼神論	一卷
一	老子經秘書	一卷	千字文註	一卷
一	錦繡段	二部	杜律集解	六卷
一	同抄	五卷	同文類	三卷
一	絕句抄	六卷	詩格	五卷
一	千家詩	一卷	朗詠註	五卷
一	同首書	一卷	新朗詠	二卷
一	五友詩	一卷	禪林風月集	一卷

一	江湖風月集	二卷	長恨歌	一卷
一	扶桑千家集	一卷	胡曾詩	一卷
一	同名詩	三卷	詩法授幼	一卷
一	大仏詩集	二卷	中華若木詩	一卷
一	山谷詩	一卷	山谷詩草	一卷
一	盧綸詩集	一卷	杠工絶句	一卷
一	寒山子詩	一卷	九相詩	一卷
一	本朝詩仙	一卷	詩仙	一卷
一	砧石集	四卷	下学集	合一
一	入学図説	二卷	戊辰試毫	一卷
一	寂室録	一卷	風土記	一卷
一	温泉游草	一卷	華上集	一卷
一	嘉吉記	一卷	宝物集	一卷
一	鴨長明記	一卷	芝蘭集	一卷
一	和漢合図	三卷	忠經集註	一卷
一	蠡海集	一卷	犬追物語	一卷
一	菊花百詠	三卷	大成論	一卷
一	菊花詩絶	一卷	勢陽游記	一卷
一	丙辰紀行	一卷	聚楽物語	三卷
一	続無名抄	二卷	牡丹鏡	三卷

一	閑居友	二卷	高野十八景	一卷					
一	繪本宝鑑	六卷	杜丹道知	二卷					
一	甲乱集	一卷	覆醬集	一卷					
一	徒然文段抄	七卷	伊勢物語抄	五卷					
一	聞書秘伝抄	二卷	身延道記	一卷					
一	君臣故事句解	一卷	撰集抄	三卷					
一	春秋左伝序	一卷	儒釈筆陳	一卷					
一	書簡初学抄	一卷	悔草	三卷					
一	王代一覽	七卷	名乘手鏡	一卷					
一	字彙	十四卷	漢王篇	十二					
一	神祇服記	一卷	中臣瑞穂抄	一卷					
一	神社考	六卷	神道名目	三卷					
	唐本		神代卷						
一	文選	十四	通鑑節用	一卷					
一	赤水玄珠	一卷	群書六言	二卷					
一	韻字大成	一卷	四書	合五					
一	少微通鑑	九卷	詩經	二卷					
一	左伝合註	十六	花史	六卷					
一	必読古文	五卷	詩学大成						
<hr/>									
			小本						
一	書籍目録	五	京羽二重	六					
一	食物徴考	三	地錦抄	五					
一	古文前集	一	古文後集	一					
一	節序紀原	一	増補助語辞	一					
一	東坡絶句	一	李杜絶句	一					
一	聯句初心抄	一	三昧志 詩カ	一					
一	杜律集解	一	三重韻	一					
一	倭漢年表録	一	三体思絶句	一					右同
一	山谷絶句	一	伊呂波韻	三部					
一	聚分韻	一	蒙永標題	一					
一	日用食性	一	統錦綉段	一					
一	年中故実	一	新選対類	二部					
一	聯珠詩格	二	詩文大鉢	一					
一	修治纂要	二	嘉多言	二					
一	湯山千句	一	袖珍略韻	一					
一	韻鏡	二部	大名鑑	四					
一	回春	四	全九集	七					
一	釈教要言	一	拔書	一					
一	三蔵明文集	一	肝文雜記	一					

一	語録	一	雜記	一
一	史要	一	字正尽	一
一	二諦集	一	無題要文集	六

正徳二年六月二五日書之

西方寺釈空恵

付録一 空惠著述名一覽表

	著述年時		
1	元禄3年(一六九〇)7月18日	【阿弥陀如来三種印相秘決義解】	一卷 30歳
2	元禄16年(一七〇三)12月	【觀經四帖疏商量鈔】	二十卷 43歳
3	正徳2年(一七二二)6月25日	【聖教目錄】	一卷 52歳
4	正徳3年(一七二三)春	【選択商量鈔】	八卷
5	正徳3年(一七二三)8月	【浄土真宗改悔弁(改悔秘決)】	一卷 53歳
6	正徳3年(一七二三)8月	【秘決鈔】	一軸 53歳
7	正徳4年(一七二四)7月	【報恩講式嘆徳称揚鈔】	三卷 54歳
8	享保3年(一七一八)	【安樂集扶輪鈔並科文】	合六卷 58歳
9	享保3年(一七一八)	【洛陽徳正寺鐘銘】	一帖 58歳
10	享保5年(一七二〇)1月	【正信念仏偈秘決鈔】	二卷 60歳
11	享保5年(一七二〇)7月	【無量寿経綱維】玄譚一卷分科	合三卷 60歳
12	享保6年(一七二二)9月	【(三帖)和讃秘決鈔】	八卷 61歳
13	享保6年(一七二二)11月	【浄土論註風航鈔並分科】	十卷 61歳
14	享保7年(一七三二)	【無量寿経典覽鈔】	十卷 62歳
15	享保8年(一七三三)9月下旬	【感日峰和尚高記書】	一文 63歳
16	享保9年(一七三四)1月	【賀詞文】(仮称)槩林真光院会下	一通 64歳
17	享保9年(一七三四)春	【謹白槩山泉堂大和尚法座下】	一文 64歳
18	享保9年(一七二四)8月	【伏見記並銘】	一冊 64歳
19	享保10年(一七二五)	【河州茨田郡古橋庄願得寺記】	一卷 65歳
20	享保12年(一七二七)5月24日	【伏見三社縁起】	一卷 67歳
21	享保12年(一七二七)10月	【雜行正行雜修專修之积義】(仮称)	一卷 67歳
22	享保12年(一七二七)10月	【雜行正行雜修專修之积義跋文】	一文 67歳
23	享保14年(一七二九)8月	【浄土真宗改悔弁の奥書】	片文 69歳
24	享保14年(一七二九)9月	【立不立之義論】(仮称)	一帖 69歳
25	享保14年(一七三〇)9月	【三州恩任寺惠春へ添文】	一文 69歳
26	享保16年(一七三三)3月	【河州池之島泉証寺堂舎記】	一卷 71歳
27	享保16年(一七三三)8月	【愚秃鈔試解並分科】	合五卷 71歳
28	享保17年(一七三三)1月	【伏見常福寺堂舎再建之祝詞】	一卷 72歳
29	享保17年(一七三三)2月15日	【浄土文類管解並科】	合六卷 72歳
30	享保17年(一七三三)5月17日	【祖師御系図】(本願寺開祖親鸞(聖人歴代系譜))	一卷 72歳
31	享保17年(一七三三)6月	【親鸞聖人略伝】(祖師略伝)	一卷 72歳
32	享保18年(一七三三)3月	【和州小泉館舎記】	一卷 73歳
33	享保18年(一七三三)3月	【藤原御系図】	一卷 73歳
34	享保19年(一七三四)7月	【瑞泉寺本泉寺願得寺系図】	一卷 74歳
35	享保19年(一七三四)冬	【覚如上人略伝】	一卷 74歳
36	享保19年(一七三四)冬	【覚如上人伝跋文】	一文 74歳
37	享保20年(一七三五)2月	【存覚上人略伝】	一卷 75歳
38	享保20年(一七三五)3月	【実從和尚遺跡記】(仮称)	一帖 75歳



- 39 【選撰集聞書】 一卷 元文1年(七三六)6月7日 76歳
- 40 【釈浄智追慕記】 一文 元文1年(七三六) 76歳
- 41 【撰州平野惠光寺記(仮称)】 一卷 元文2年(七三七)5月5日 77歳
- 42 【伏見大亀谷桜町大神宮縁起】 一卷 元文3年(七三八)9月 78歳
- 43 【河州美田郡池田邑即四寺鐘鐺勸進帳之序】 一文 元文4年(七三九) 79歳
- 44 【即圓寺鐘銘並序】 一文 元文4年(七三九)9月 79歳
- 45 【真宗要決】(漢文) 上下二卷 元文4年(七三九)9月15日 79歳
- 46 【自叙伝】(仮称) 一卷 元文4年(七三九)9月15日 79歳
- 47 【中陰年忌期限】(追善行法年序) 一卷 元文5年(七四〇)2月 80歳
- 48 【聖徳太子略伝】 一冊 元文5年(七四〇)3月16日 80歳
- 49 【宗門深秘之法語】(仮称) 一卷 元文6年(七四一)(2月8日) 81歳
- 50 【上坂惟勝へ添文】 一文 元文6年(七四一)(2月8日) 81歳
- 51 【真宗妨難記】 一卷 寛保2年(七四二) 82歳
- 52 【伏見大亀谷十景詩歌】 一卷 延享1年(七四四)12月18日 84歳
- 53 【改悔之事】 一卷 延享3年(七四六)5月28日 86歳

年時不詳著述名

- 54 【弥陀経纂要】(弥陀経弁義) 三卷 (空恵の「聖教目録」に記載あり)
- 55 【真宗秘決鈔】 一卷 (初期宗学界に於ける西方寺空恵の研究の文  
中に大谷派先聖著述目録に記載ありとす)
- 56 【親鸞聖人伝略並影像記】 一卷 (浄土真宗雑著部)に記載あり)

【相伝義書】相伝家の聖教目録について(一)

- 57 【蓮如上人縁起】 二卷 (大谷派先聖著述目録補遺に記載あり)
- 58 【西方寺並銘】 一卷 (真宗全書)雑文集に記載
- 59 【河州若江郡萱振庄惠光寺記】 一卷 (真宗全書)雑文集に記載
- 60 【西来寺鎌倉伏見転住記】 一卷 (真宗全書)雑文集に記載
- 61 【伏見名所略記】 一卷 (初期宗学界に於ける西方寺  
空恵の研究)に記載あり)
- 62 【観音講和讃】 十八首 (初期宗学界に於ける西方寺  
空恵の研究)に記載あり)
- 63 【教行信証題註】 一卷 (空恵の「聖教目録」に記載あり)
- 64 【教行信証拾遺】 十五卷 (空恵の「聖教目録」に記載あり)
- 65 【文永九年宗門開闢記】(漢文) 一卷 (真宗全書)雑文集に記載
- 66 【正信念仏偈試科並考録】 一卷 (初期宗学界に於ける西方寺  
空恵の研究)に記載あり)
- 67 【聖皇本記】 一卷 (真宗全書)雑文集に掲載
- 68 【親鸞聖人木像絵像由緒】 一卷 (大谷派先聖著述目録補遺に記載あり)
- 69 【節分夜平太郎縁起法談】 一卷 (大谷派先聖著述目録補遺に記載あり)
- 70 【譬喩鈔】 二卷 (浄土真宗雑著部)に記載あり)

(注) 番号に○印が付けられているのは、「真宗全書」巻七三の「雑文集」に掲載されていることを示す。

付録二 西方寺空恵の事跡年譜

西方寺空恵の事跡年譜

〔凡例〕

- 一、空恵が生れた寛文元年（一六六一）から入寂の延享三年（一七四六）までを収めた。
  - 二、頁の上から順次、西暦、和暦、門主、空恵の年齢、空恵の事跡、学事・相伝関係の欄をもうけた。
  - 三、死没の事項は、人物名と（ ）内に数え年を記入した。
  - 四、事項の出典は紙面の都合上省略した。
  - 五、相伝関係は、（相伝）と銘記した。
  - 六、参考文献は、以下の書物等である。
- 〔初期宗学界に於ける西方寺空恵の研究〕・〔雑文集〕・〔真宗要決〕・〔大谷派学事史略年表〕・〔真宗年表〕（大谷大学編）・〔東派一流系図〕・〔相伝に関する年表〕（教化研究94号）など。

西暦	和暦	門主	令	空恵の事跡	学事・相伝関係
一六六一	寛文元年 4月25日改元	琢如	1	佐渡国佐渡郡河崎村字権泊の長善寺了賢太愛の第十男として生る。	万治4年3月親鸞聖人四〇〇回御遠忌厳修。
一六六二	二年		2		玄誓10月8日 〔正信偈〕を常如上人の御前で講義。
一六六三	三年		3		真宗寺乗珍・円珍東派帰参（相伝）。西吟没（59）。
一六六四	四年 常如 12月		4		玄誓2月28日 〔正信偈〕を常如上人の御前で講義。
一六六五	五年		5		東派、東坊に学寮を創設。空閑西方寺に入寺。了海・月感東派に帰参。

二六六	六年	6
二六七	七年	7
二六八	八年	8
二六九	九年	9
二七〇	十年	10
二七一	十一年	11

二六六 本堂再建の使僧として玄誓、照空を五畿内に派遣。11月19日円智、玄誓、賢恵ら教暎の息良秀を調理して常如上人に上進。  
 二六七 玄誓の息祐円学寮に入学。  
 二六八 11月25日大通寺従高没(54)。  
 二六九 1月23日教行寺教誓没。恵空は円智に入門。  
 二七〇 恵空出堂。円智没。  
 二七一 東派、内事に学問所設置。琢如没(47)、如晴得度。教行寺宣誓上洛「御本書」等を校合す(相伝)。

二七二	十二年	12
二七三	延宝元年 9月21日改元	13
二七四	二年	14
二七五	三年	15

二七二 7月1日連枝智光院宣縁より玄誓の故事に通じるを賞で宣如上人の御影を寄付。宣縁7月14日没(36)。本法寺教暎没(77)。  
 二七三 越後の浄明寺と真浄寺・本浄寺の法論議に如晴を主に玄誓、斎円、休甫ら取調べ行う。事件の所見を玄誓、休甫「十条反問之評」を認む。3月25日了海没?。(9月5日)月感没(75)。  
 二七四 大阪二八日講、唐本一切経を東本山に寄進の際、玄誓斡旋す。

一六六	四年	16	10月21日佐渡国佐渡郡金沢村中興の西蓮寺で得度す。法秀法師に師事す。	一六四	貞享元年 2月21日改元	24	9月6日西方寺入寺。空閑の長女伊佐十九歳と結婚す。	越後願生寺榮誓と高田浄興寺と論争あり、噫慶栗津入真ら調理。5月19日榮誓を追放。恵光寺昭厳・海俊東派に帰参(相伝)。
一六七	五年	17	6月上京し三条の福円寺玄以に師事す。後玄誓に謁し、学林に入学、如晴の門で奉仕す。	一六五	二年	25		
一六八	六年	18	11月18日常如上人より一如上人へ直伝、噫慶、樹心相伴(相伝)。樹心、玄誓、常如上人へ講堂の設置を請願、枳殻邸西側に創設。					
一六九	七年	19	寂玄「典籍集」全を撰(相伝)。	一六六	三年	26	夏、同門の請により「観經四帖疏」を講義す。8月18日妻伊佐没す(21)。次女遊志を後妻とす。	5月1日西派寂如上人「御本書」を講ず、寂玄、頭証寺、本徳寺拝聴(相伝)。
一七〇	八年	20	瑞泉寺宣良・上宮寺宣心兄弟東派に帰参(相伝)。光善寺良玄没(68)。	一六七	四年	27	長男正恵生る。	貞享の時、円智と玄誓は嵯峨二尊院へ古籍を求めて、「漢語灯録」を発見。
一七一	天和元年 9月29日改元	21						
一七二	二年	22	9月21日父了賢七五歳で入寂す。	一七八	元禄元年 9月30日改元	28		8月噫慶「九字十字尊号略弁」一卷を草す(相伝)。
一七三	三年	23	5月21日樹心没(35)。	一八九	二年	29	次男恵頓生る。	

一六〇	三年	30	1月17日次男惠頓二歳で没す。 5月15日兄(了賢の第九子)の真言宗大聖院惠南が、佐渡より上京し、福円寺玄以を訪問、弥陀三種之印相の玄文一軸之簡を授与す。7月18日、玄以の命によつて空恵は「阿弥陀如来三種印相秘決義解」を撰述す。	12月24日玄晉没。	一七〇	十年	37	4月12日一如上人没(52)。	4月12日一如上人没(52)。
一六一	四年	31	長女妙智生る。	三女遊佐生る。	一七〇	十三年	40	真如	11月18日噫慶より真如上人へ返伝(相伝)。
一六二	五年	32	惠空(江州野洲郡金森善龍寺書籍目録並序)を撰。	12月29日「観経四帖疏商量鈔」二十巻を撰述す。	一七〇	十四年	41	4月	11月18日噫慶より真如上人へ返伝(相伝)。
一六三	六年	33	6月28日妙智二歳で没す。 8月11日權律師に任じられる。 三男浄恵生る。	8月18日、真如上人得度、剃手噫慶(相伝)。	一七〇	十五年	42		1月29日東大谷本廟の上棟式。
一六四	七年	34	常如上人没(54)。	3月28日東大谷本廟御堂の遷仏供養。3月講堂にて如晴(論註)を講ず。噫慶講堂を司る(相伝)。	一七〇	十六年	43		3月28日東大谷本廟御堂の遷仏供養。3月講堂にて如晴(論註)を講ず。噫慶講堂を司る(相伝)。
一六五	八年	35	3月「四帖疏商量鈔」の撰述を發願す。	11月5日母妙賢九四歳で示寂す。	一七〇	3月13日改元 二年	45		南溟寺円心没。
一六六	九年	36	寂玄・一玄東派婦參(相伝)。		一七〇	三年	46		

一七〇七	四年	47	惠空、深広院常智の請にて大信寺で「論註」を講ず。	一七〇四	四年	54	2月深広院常智の命にて、7月「報恩講式嘆徳称揚鈔」三卷を撰述す。	一七〇七	四年	47	5月如晴と常智から「愚禿鈔」の註釈書を命じられ、又如晴より「愚禿鈔考記」二卷を贈られる。
一七〇九	六年	49	1月10日教行寺宣誓没(84)。7月惠光寺海俊没(59)。8月27日空閑没(71)。3月28日噫慶「広本類科文」一巻を撰(相伝)。	一七〇七	二年	57	2月16日「観経四帖疏商量鈔」十巻の清書了る。(正徳五年より三ヶ年間)	一七〇九	六年	49	8月如晴と常智から「愚禿鈔」の註釈書を命じられ、又如晴より「愚禿鈔考記」二卷を贈られる。
一七〇八	五年	48	10月6日大通寺海高没(34)。9月27日日本性寺了意没(70)。	一七〇六	五年	56	2月「正信偈秘決鈔」を撰述す。7月「無量寿経綱維鈔」三卷を撰述す。	一七〇八	五年	48	6月25日「聖教目録」一巻を撰述す。
一七〇二	正徳元年 4月25日改元	51	1月10日教行寺宣誓没(84)。7月惠光寺海俊没(59)。8月27日空閑没(71)。3月28日噫慶「広本類科文」一巻を撰(相伝)。	一七〇五	三年	58	3月21日、願楽寺にて「安楽集」を講義す。浄恵に「安楽集扶輪鈔」六巻を付与す。4月15日和州常福寺にて「定善義」を講義す。	一七〇二	正徳元年 4月25日改元	51	8月、深広院常智の命で「浄土真宗改悔辨」(秘決鈔)一巻を撰述す。
一七〇三	三年	53	真如上人、勉学精進を通達。10月9日教行寺一誓没(34)。	一七〇三	五年	60	1月「正信偈秘決鈔」を撰述す。7月「無量寿経綱維鈔」三卷を撰述す。	一七〇三	三年	53	8月、深広院常智の命で「浄土真宗改悔辨」(秘決鈔)一巻を撰述す。

一七三	六年	61	<p>2月洛陽願樂寺にて『浄土和讃』を講義す。9月『和讃秘決鈔』八巻を撰述し『正信偈秘決鈔』二巻を合して十巻を息男の正恵と浄恵に授与す。 4月より11月に及んで、『浄土論註風航鈔並分科』十巻を撰述す。 12月妻の遊志得度し法名知周と号す。 3月伊勢真楽寺にて『浄土和讃』を講義す(二十座)。 4月1日より5月10日まで河内願得寺にて『浄土論註』講義す(二八座)。 更に5月より『觀經玄義分』と『浄土和讃』を講義す。 5月中旬より6月中旬まで洛陽の徳正寺にて『浄土論註』を講義す。 『無量寿經典覽鈔』十巻を撰述す。</p>	<p>2月11日願入寺如晴没(72)。 東派末寺に勸学并学の精進を通達。</p>
一七三	八年	63	<p>3月16日より4月上旬まで洛陽の願樂寺にて『高僧和讃』一一九首講義す。 4月13日より29日まで洛陽常念寺にて『正像末和讃』一一六首講義す。 5月29日より6月23日まで八尾(大信寺)御坊にて『高僧和讃』を講義す(二二座)。 9月下旬に、黄檗山の日峰より『賞菊記』一卷を贈られたので、その返記として『感日峰和尚高記書』一文を撰す。 1月黄檗山真光院に『賀詞文』一文を送る。 春、黄檗山の杲堂に『無量寿經典覽鈔』七巻を贈る。 その時の添文『謹白驀山杲堂大和尚法座ノ下』を撰す。 6月に河内願得寺にて『高僧和讃』を講義す。 8月2日より21日まで、河内八尾(大信寺)にて『正徳末和讃』を講義す(二八座)。 8月に『伏見記並銘』一冊を撰述す。</p>	<p>2月上旬一女『愚禿鈔科文』を書写(相伝)。 順興寺寂証没(70)</p>
一七三	七年	62		
一七四	九年	64		

一七五	十年	65	<p>東本願寺の学寮にて、5月9日より18日まで『浄土和讃』を講義す(二十九座)。5月19日より6月9日まで『高僧和讃』を講義す(一七座)。6月16日より23日まで『正像末和讃』を講義す(六座)。この時、真如上人より専称寺恵然と共に晒布一疋を下賜される。</p>	<p>6月4日一玄 『観経講記』を撰(相伝)。</p>
一七六	十一年	66	<p>8月河内八尾御坊(大信寺)にて『浄土論註』を講義す(三三座)。 河内願得寺にて『大経』及び『安楽集』を講義す。この時、願得寺にて『河州茨田郡古橋庄願得寺記』一卷を撰述す。 2月河内即円寺にて『浄土和讃』を講義す(六座)。続いて3月には、『高僧和讃』を講義す(七座)。 3月河内願得寺にて『正像末和讃』を講義す。3月晦日講了(七座、合一五座)。</p>	<p>2月13日円澄没(42)。6月9日真如上人学寮にて講義を聴講。 7月16日寂玄没(72)。</p>
一七六	十三年	68	<p>5月24日頃『伏見三社縁起』一卷を撰述す。 9月5日、自坊の西方寺にて『安楽集』を講了す。(上巻一五座、下巻十座の合二五座)。 10月河州交野の祐念寺恵照に雑行正行、雑修専修の釈義を口授し恵照が筆録す。 2月1日より3月5日まで大和教行寺にて『浄土論註』を講義す。 4月河内即円寺にて『安楽集』を講義す(二十座)。 4月自坊の西方寺にて『玄義分』五巻を講義す。</p>	<p>5月6日一玄 『正信偈』を講義(相伝)。</p>
<p>4月13日教行寺真誓没(19)。 9月19日は空没(58)。</p>				



2月20日より4月10日まで洛東蓮花王院側の小坊にて『浄土論註』を講義す(三五座)。  
 4月15日より5月20日まで東本願寺学寮にて『安樂集』を講義す(二八座)。  
 夏、洛東遮那殿南隣大悲閣(蓮華王院)の側の小坊にて、『浄土和讃』を講義す。  
 7月1日、真如上人より空惠隠居によって、晒布二疋を下賜される。  
 8月、自坊の西方寺にて『高僧和讃』を講義す、8月26日講了(一七座)。また8月に『選択集』も講義す。  
 9月、西方寺にて『正像末和讃』を講義す、9月16日講了(一二座)。  
 9月、洛東の小坊にて、三河高浜恩任寺惠春舜岳へ請によって立不立之義を撰述して与う。  
 秋、『浄土真宗改悔弁』一卷の奥書を記して常福寺円誓と正楽寺賢哲とに一卷を与う。

9月19日長浜御坊(大通寺)にて『浄土和讃』を講義す(六座)。

真玄筆の父一玄『阿弥陀経講記』なる(相伝)。

3月より4週間河州泉証寺にて『選択集』を講義す。また3月、於河州池之鳥泉証寺堂舎記一卷を撰述す。  
 8月『愚秃鈔試解並分科』合五卷の草稿本を撰述す。

順興寺寂靜没。加陽正寿寺歌苑『浄典目録』を撰。

1月『伏見之縣常福寺堂舎再建之祝詞』一卷を撰述す。  
 2月15日『浄土文類管解並科』合六卷を撰述す。  
 5月17日『祖師御系図』(本願寺開祖親鸞聖人歴代系譜)一卷を撰述す。  
 6月『親鸞聖人略伝』(祖師略伝)一卷を撰述す。  
 3月『藤原御系図』一卷を撰述し、その一本を本山に献上す。  
 3月和州の小泉で『於和州小泉ノ館記』一卷を撰述す。

一七四	十九年	74	<p>7月『瑞泉寺本泉寺願得寺系図』二巻を撰述す。冬、『覚如上人略伝』二巻を撰述す。</p> <p>2月『存覚上人略伝』二巻を撰述す。</p> <p>3月伏見興禪寺覚恵のために実従の『遺跡記』一帖を撰述す。</p> <p>(享保年間、河内八尾御坊及び、大和常福寺にて『安楽集』を講義す。)</p>	5月21日円環没(39)。
一七五	二十年	75	<p>6月7日、恵光寺怪敵のところ、で『選択集』を講義す。その時怪敵の筆録で『選択集聞書』一巻なる。</p> <p>8月晦日、自坊の西方寺にて『浄土和讃』を講了す(六座)。続いて9月『高僧和讃』を講義す。</p> <p>伏見の吉村浄智の二三回忌に『釈浄智追慕記』一文を撰述し、これを息男の吉村好信に贈る。</p> <p>5月5日、恵光寺性俊の請によって『選択集』を講義す。この時『恵光寺記』一巻も撰述す。</p>	
一七六	元文元年 4月28日改元	76		
一七七	二年	77		
			<p>9月、伏見大神宮について『伏見大亀谷桜町大神宮縁起』一巻を撰述す。</p> <p>5月洛陽四条徳正寺にて『正信偈』を講義す。</p> <p>即円寺了閑の請によって『河州茨田郡池田邑即円寺鐘鑄勸進帳之序』一文を撰述す。9月『即円寺鐘銘並序』一文を撰述す。</p> <p>9月15日『真宗要決』(漢文)上下二巻を撰述す。その付録に『自叙伝』を載せる。</p> <p>12月4日、妻知周尼七十歳で示寂す。</p>	
			79	78
			四年	三年
			一七九	一七八

一七四〇	五年	80	2月、智周尼滿中陰法要のことで受賢の問いに答えて『中陰年忌期限』（『追善行法年序』）一卷を撰述す。 3月16日『聖徳太子略伝』一卷を撰述す。 閏7月4日三女の遊佐四十歳で入寂す。 10月22日『愚禿鈔試解並分科』の第一冊を改補する。10月23日第二冊を改補す。12月13日第三冊を改補する。12月28日第四冊を改補して、完成させる。
一七四一	二年	82	（2月8日）故上坂兼勝の一周忌に息男の惟勝に宗門深秘之法語を書写して与う。
一七四二	三年	83	4月23日長福寺方広通元『古今浄典目録』を撰。5月、先啓『浄土真宗聖教目録』を撰。 11月本泉寺海俊没（49）。 8月14日真如上人の嫡男玄如上人没（22）。

【相伝義書】相伝家の聖教目録について(二)

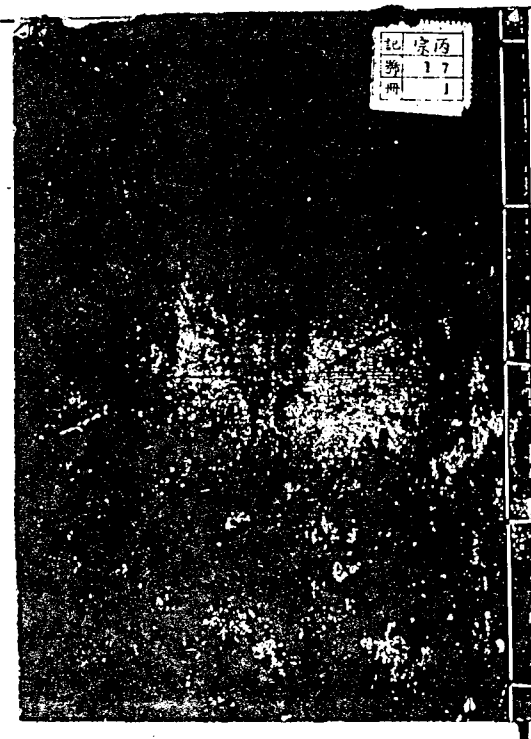
一七四三	二年	85	12月18日『伏見大亀谷十景詩歌』一卷を撰述し、伏見大神宮に奉納す。
一七四四	三年	86	5月28日、諸人の請によつて『改悔之事』一卷を撰述す。 9月4日、空恵没（86）。

8月13日浄心寺靈鳳没（50）。  
10月2日真如上人没（63）。  
12月12日融如上人没（22）。  
5月28日従如上人へ一玄より返伝、相伴真智・真玄・真覚（相伝）。  
11月22日大信寺真智没（34）。  
8月7日一玄没（64）。  
光善寺真玄、浄興寺より祖師の分骨を賜わる（相伝）。

原典研究資料

同朋学園佛教文化研究所紀要第十三号

大谷大学図書館所蔵  
西方寺空惠聖教目錄



成列傳見全私西方寺什物

西方寺十二世專修坊叔座開聖教書寫部類

親寫聖人創作

教行信證

面寫真像經文

唯信歎文意

一念多念文意

三經往生文類

專修念佛問答致

皇太子奉讚

源盛聖人創作

選擇集

本願相應集

八卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

一卷

二卷

二卷

一卷

念佛得失義

一卷

菩提錄より愚真書に世中惡念所作上之文多し人元  
來定往主行來抄本類相應抄安心起行作來抄九卷ノ此  
改所入進不所起事世文長餘ノ和語書ニ文章七條ノ義  
勢是連入り大令ニ疑ヒ凡之文章人信書ト申傳ノ又念松  
得失義上之文アリ聖人所作上云リ然正是公正ノ又人  
少レ止文也正上 但用在淺看意樂也了了力也意ノ  
子公ニソム方又

念佛往生要義抄

一卷

一教起請二教請

一卷

改上人法語

一卷

唯信欽

一卷

後世物語

一卷

陸寛律師作

一卷

一念多念分別

一卷

自力他力之事

一卷

如信上人作

一卷

他力信心開書

二卷

逐個廻向開書

一卷

唯信抄

一卷

遷取肝要抄

一卷

覺如上大作

一卷

寂要抄

一卷

真宗用意

一卷

願之抄

一卷

修土文類集

一卷

肝要記

一卷

終解記

一卷

本願抄

一卷

因果抄

一卷

真宗意傳抄

一卷

修土見聞集

一卷

木燈抄

二卷

捨道巨德傳

全部九卷 合卷

口傳抄

三卷

改邪抄

一卷

親持抄

一卷

御傳抄

二卷

報恩論式

一卷

兩師論式

一卷

報恩講式

一卷

十四行偈開書

一卷

款異抄

一卷

華心定抄

二卷

或云西山流義ノ抄也云云又愛台裏云此書只加賀山田ノ  
先教寺先開坊蓮隆ノ息頭抄業作也云云又云兼專所  
望言子見如上人副作云

一 運要抄 一 御消息集 一 八存覺上人作 一 持名抄 一 眞際抄 一 指神本懷集 一 破邪顯正抄 <small>是四部九帖之上之</small> 一 女人往生聞書 一 乘取抄 一 艾智抄 一 法華問答	一 一卷 一 一卷 一 二卷 一 二卷 一 二卷 一 三卷 一 二卷 一 二卷 一 二卷 一 二卷 一 二卷 一 二卷 一 一卷 一 一卷	一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷	一 六軍談 一 十卷
一 眞宗血脈傳來抄 一 三信三心同一之章 一 報恩紀 一 至道抄 一 弁述名解集 一 頭名抄 一 法語 一 撰法法解抄 一 修五眞宗聞書 <small>或性信房作</small> 一 嘆徳 一 錦鞵寺縁起 一 常樂寺三期記	一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷	一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷	一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷

一 毘沙門經 一 佛覺上人作 一 藏經詞 一 存如上人作 一 秘傳 一 蓮如上人作 一 御文 一 外所文 一 正信偈大意 一 荷聖集 一 教行信證題抄 一 本願成就聞書	一 一卷 一 一卷 一 十卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 三卷 一 三卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷	一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷	一 隆寛作 一 隆寛作
一 信一念御筆記 一 級命書 一 教化集 一 寂須教重繪詞 一 修云云宗聞書 一 安心義 一 教化集 一 在公巽要抄 一 自要集 一 雜記 <small>與聞書 蓮如上人作 法慈上人秘傳但于十卷内卷不足</small> 一 還愚顯真抄 一 自力化力事	一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷	一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷 一 一卷	一 隆寛作 一 隆寛作

○ 聖道淳工名目	一 卷	
○ 謝德抄	一 卷	
○ 倚聲抄	一 卷	
○ 變古集	一 卷	
○ 蓮如上人御物誌	一 卷	聖山 光園房頭筆作
○ 蓮如上人御代記	一 卷	實悟之記
○ 野村記	一 卷	仰才發運判記
○ 親寫上人血脈文集	一 卷	
○ 親寫上人御目錄	一 卷	
○ 眞佛目錄	一 卷	
○ 滄海之事	一 卷	
○ 蓮如大遺德記	一 卷	實悟撰 蓮悟記
○ 朋真抄	一 卷	存實作
○ 馬谷上人遠流記	二 卷	
○ 不思談同答	一 卷	
○ 女人教化抄	一 卷	
○ 十一王讚嘆	一 卷	
○ 段余本願抄	一 卷	
○ 杖尊出家傳記	一 卷	
○ 大佛供養物誌	一 卷	
○ 爲盛奉心集	一 卷	
○ 平太郎縁起	一 卷	
○ 弥陀自行記	一 卷	

○ 一 芥陔經教集	一 卷	
○ 一言法談	一 卷	
○ 實悟筆記	一 卷	
○ 念佛明要抄	一 卷	
○ 万法歌	一 卷	
○ 淳工法門見聞集	一 卷	
○ 三宗軍略	一 卷	
○ 三身六教	一 卷	
○ 九重大意抄	一 卷	
○ 信心大意抄	一 卷	
○ 聖教抄書	一 卷	存實作 隆光作
○ 善慈上人法語	一 卷	
○ 須勒用心	一 卷	
○ 三心出要抄	一 卷	
○ 三部假名抄	七 卷	
○ 稱讚經	一 卷	
○ 延命救世經	一 卷	
○ 洗浴經	一 卷	
○ 瑞應刪傳	一 卷	
○ 華嚴女教後書	一 卷	
○ 心經抄	一 卷	

- 一 大論拾用 一卷
- 一 修玉無主論 一卷
- 一 明心宝鑑 一卷
- 一 略論 一卷
- 一 大藏經目錄 一卷
- 一 大教感應傳 一卷
- 一 無常說記 一卷
- 一 四座簡式 一卷
- 一 修玉各月附書 一卷
- 一 諸經要集後書 一卷
- 一 摩訶經要後書 一卷

- 一 自務管亦集成最 一卷
  - 一 本法燈明記 一卷
  - 一 寺社縁起雜錄 一卷
  - 一 本朝四丁度宗論記 一卷
  - 一 邪義交産稿文 一卷
  - 一 龍述集 一卷
  - 一 七降鏡 一卷
  - 一 破邪同卷 一卷
- 以上三十部

山智作

- 一 准驗抄 一卷
- 一 秘啓集 一卷
- 一 宗堂文 一卷
- 一 秘疑抄 一卷
- 一 龍隱堂文 一卷
- 一 代力領解抄 一卷
- 一 感嘆抄 一卷
- 一 譬喻草 一卷
- 一 諸佛慈悲集 一卷
- 一 修玉簡式 一卷
- 一 真宗行事 一卷
- 一 指註私觀子 一卷

- 一 道門宗記 一卷
- 一 安心定處抄私記 一卷
- 一 持名抄私記 一卷
- 一 興作書抄 一卷
- 一 和讃科考 一卷
- 一 報見論式異讀 一卷
- 一 愚堅抄 一卷
- 一 鼠雀問答 一卷
- 一 閑疑抄 一卷
- 一 用意集 一卷
- 一 一枚起請符海安 一卷
- 一 遷扶問書 一卷

慶秀作  
同作  
高田惠雲作  
山智作



一 正信上人所詠歌 一卷  
 一 四光大師畧傳 一卷  
 一 四光大師号繪詞 一卷  
 一 嘆異秘私記 一卷  
 一 一宗行俠秘 一卷  
 一 蔡札記 一卷  
 已上三十部  
 因智作

一 翁像不佞記録 秘書 一卷  
 一 眞宗聖跡 秘書 一卷  
 一 眞宗改宗略記 秘書 一卷  
 一 天梯 一卷  
 一 續天梯 一卷  
 一 續無名抄 一卷

一 正信偏私札書入 一卷  
 一 和讀私記 書入 一卷  
 一 正信偏科 一卷  
 一 余部五卷合三卷

一 和讀五首畧註 一卷  
 一 和讀四十八首聞書 一卷  
 一 現世利益和讀大意 一卷  
 一 和讀老翁記 一卷  
 一 序五和讀首書 一聘  
 一 七一首和讀秘 一卷  
 一 和讀私記追加 一卷  
 一 正信外記 四卷  
 一 眞宗聖跡集 秘書 一卷  
 一 四輩安住集 秘書 一卷  
 一 四輩縁起 一卷  
 一 秘聚集 一卷  
 一 新國散在記 一卷  
 一 越舟三門從縁脈 一卷  
 已上正二部  
 因智作

一 大成經正部 公事本記 一卷  
 一 大成經雜部 一卷  
 一 和論語 一卷  
 一 雜波歌記 六卷  
 一 民家古今撰歌記 二卷  
 一 民家法度記 一卷

一 和讀五首畧註 一卷  
 一 和讀四十八首聞書 一卷  
 一 現世利益和讀大意 一卷  
 一 和讀老翁記 一卷  
 一 序五和讀首書 一聘  
 一 七一首和讀秘 一卷  
 一 和讀私記追加 一卷  
 一 正信外記 四卷  
 一 眞宗聖跡集 秘書 一卷  
 一 四輩安住集 秘書 一卷  
 一 四輩縁起 一卷  
 一 秘聚集 一卷  
 一 新國散在記 一卷  
 一 越舟三門從縁脈 一卷  
 已上正二部  
 因智作

- 一 日本氏將畧記 一卷
- 一 日本書籍考 一卷
- 一 大連物語 一卷
- 一 松平閣遺記 一卷
- 一 重宝托粹 一卷
- 一 文英苑 一卷
- 一 西窓日記 一卷
- 一 東氏名初記 一卷
- 一 見園花林 一卷
- 一 正意記行 一卷
- 一 月宵録 一卷
- 一 鉄槌論 一卷

- 一 五光大全 一卷
- 一 銘文集 一卷
- 一 銘文集記 一卷
- 一 雜覽書 一卷
- 一 天主寺年中行事 一卷
- 一 已上元三部 一卷
- 一 都合二百三十九部 一卷
- 一 神國史疑編 一卷
- 一 古今人物志 一卷

二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷

二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷 二卷

- 一 無量壽經網維鈔 三卷 西方寺 空慧撰
- 一 無量壽經益算鈔 十卷
- 一 觀經義尚量鈔 二十卷
- 一 除夜經纂要 三卷
- 一 淨土論註風帆鈔 十卷
- 一 樂集扶輪鈔 六卷
- 一 選擇尚量鈔 八卷

同 同 同 同 同 同 同

- 一 式敷徳松揚鈔 三卷
- 一 正傷秘火 二卷
- 一 和譜秘火 八卷
- 一 親鸞聖人略傳 一卷
- 一 愚禿鈔試解 四卷 外分科 同
- 一 淨土文類管解 九卷 外分科 同
- 一 教行信證拾遺 十五卷

同 同 同 同 同 同 同

西方寺安蓋印刊書籍目録  
 三部圖經 二部 八卷 内系作別長壽寺の賢大聖遺物  
 同空西標 一部 七卷  
 望西首書 一部 七卷  
 大經科註 一部 六卷  
 大經見用 一部 七卷  
 大經要註記 一部 八卷  
 教行證 二部 八卷  
 六要抄 一部 十卷  
 法華科註 一部 十卷  
 月北林 一部 十卷  
 楞嚴經 一部 十卷  
 月傳來記 二卷

一 一覺如上人傳 二卷 同  
 一 存覺上人傳 一卷 同  
 一 蓮如上人傳 二卷 同  
 一 伏見記 一卷 同  
 一 祖師御系 三卷 同  
 一 教行信證題註 一卷 同  
 一 改悔秘史 一卷 同

一心經略抄 一卷  
 月梵字註 一卷  
 月註解 一卷  
 月性證註 一卷  
 十輪經 合卷  
 心代視經 二卷  
 重慶金經觀 合卷  
 月應關記 八卷  
 月通今記 二卷  
 月新抄 二卷  
 月抄 二卷  
 月法式 一卷  
 行儀記 七卷  
 六物抄 三卷  
 六物圖 三卷  
 竹意隨筆 一卷  
 元享教書 三卷  
 三教指歌 三卷  
 三宅感應錄 二卷  
 明眼論 二卷  
 疑問答 一卷  
 隆安安私 一卷  
 續性生傳 一卷  
 瑞應剛傳 一卷

金剛經集要 二卷  
 金剛經畧抄 二卷  
 小經義疏 一卷  
 月關待記 一卷  
 月義記 一卷  
 月略記 一卷  
 月通讚 一卷  
 月要解 一卷  
 月略解 一卷  
 月疏抄 一卷  
 月管解 二部  
 天台觀註疏 一卷  
 月句解 一卷  
 法界宗文 二卷  
 性理宗文 二卷  
 濟北集 二卷  
 名義集 二卷  
 付法傳 二卷  
 秋安聖覽 三卷  
 冷齋夜話 三卷  
 四教夜話 三卷  
 燈前夜話 二卷

- 一 四覽注更抄
- 一 觀音經義抄
- 一 心經顯正記
- 一 金光明經卷之
- 一 十五經
- 一 四果經
- 一 延命散身經
- 一 善慧白象經
- 一 起信論疏
- 一 同筆削記
- 一 同明集解
- 一 六折功位經抄

二部

- 一 四卷 般若文系
- 一 二卷 日本未來記
- 一 一卷 歡氏在考
- 一 一卷 董勸抄
- 一 一卷 遺教經補註
- 一 一卷 愚述念集
- 一 一卷 遊仙密
- 一 一卷 三智抄
- 一 八卷 請來法教
- 一 六卷 女教章
- 一 三卷 日本往生傳
- 一 一卷 念珠曼陀

- 一 聖明論
- 一 十疑論
- 一 迦才傳五論
- 一 群疑論
- 一 系人論
- 一 同解
- 一 同卷微錄
- 一 同前書
- 一 無性論
- 一 像法變經
- 一 恩重經
- 一 光明真言抄

- 一 合一卷 註子疑
- 一 一卷 枝葉隱逸傳
- 一 七卷 西谷名目
- 一 一卷 傳上文
- 一 三卷 大勸抄
- 一 一卷 谷響集
- 一 三卷 本朝書籍考
- 一 一卷 無垢子心記
- 一 一卷 臨終要文
- 一 一卷 念佛得救
- 一 一卷 靈種放生文

- 一 大藏一覽
- 一 一卷 經錄
- 一 傳玉疑問
- 一 以藏感應傳
- 一 飯元直指
- 一 不動尊應抄
- 一 天竺往生驗記
- 一 舍利記
- 一 月月行道圖
- 一 卷雲隱抄
- 一 新撰正行伏
- 一 卷雲獨抄

- 一 十卷 隱雨記
- 一 八卷 集解新抄
- 一 一卷 華文類聚抄
- 一 一卷 真言名目
- 一 一卷 六物有書
- 一 一卷 阿字觀
- 一 一卷 止觀卷
- 一 一卷 三界義
- 一 一卷 正直集
- 一 一卷 危言抄
- 一 一卷 榮陰
- 一 一卷 佛祖三經 部

- 一 楞嚴經
- 一 樂邦文類
- 一 寸目
- 一 論經
- 一 寸經記
- 一 寸見聞
- 一 講錄後傳記
- 一 太子傳
- 一 安樂集
- 一 同松記
- 一 同錦開
- 一 光疑抄

- 一 一卷 東教相感志
- 一 一卷 立會讀 部
- 一 一卷 十目記
- 一 二卷 二藏表
- 一 一卷 寸見聞
- 一 一卷 傳若名目
- 一 一卷 寸見聞
- 一 三卷 寸見聞
- 一 二卷 傳通記
- 一 一卷 翻鈔
- 一 一卷 玄奘經記
- 一 一卷 直探



一	四書大全	儒書	七卷	五經	八卷
一	同首書		十卷	史記	十卷
一	易集註		十卷	詩經集註	十卷
一	書經集註		十卷	莊子	十卷
一	老子經		二卷	書經旁考	七卷
一	同首書		二卷	書經旁通	八卷
一	同抄		二卷	秀經大義	八卷
一	論語古註		三卷	孟子存記	一卷
一	同原記		三卷	蒙求諸	一卷
一	小學句讀		四卷	古文前集	二卷
一	近思錄		四卷	古文後集	二卷

一	百文抄	十卷	稽古錄	一卷
一	同考	一卷	鬼神論	一卷
一	老子經集註	一卷	十段文註	一卷
一	錦繡段	二部	在傳集解	六卷
一	同抄	五卷	日文類	三卷
一	終身抄	六卷	詩格	一卷
一	千家詩	一卷	詞話註	一卷
一	同首書	一卷	新詞錄	二卷
一	古文詩	一卷	樺林几月集	一卷
一	江湖風月集	一卷	長恨哥	一卷
一	扶桑十家集	一卷	胡曾詩	一卷
一	同名詩	三卷	詩法披幻	一卷

一	大佛詩集	二卷	中華耆老詩	一卷
一	山谷詩	一卷	山谷詩州	一卷
一	塵翁詩集	一卷	枉工終句	一卷
一	寒山子詩	一卷	九洞詩	一卷
一	本朝詩仙	一卷	詩仙	一卷
一	礦石集	四卷	下學集	八卷
一	入世園記	二卷	皮履談毫	一卷
一	寂室錄	一卷	爪土記	一卷
一	溢泉落筆	一卷	華上集	一卷
一	嘉吉記	一卷	室物集	一卷
一	鴨長明記	一卷	芝菌集	一卷
一	和漢合圖	三卷	忠經集註	一卷

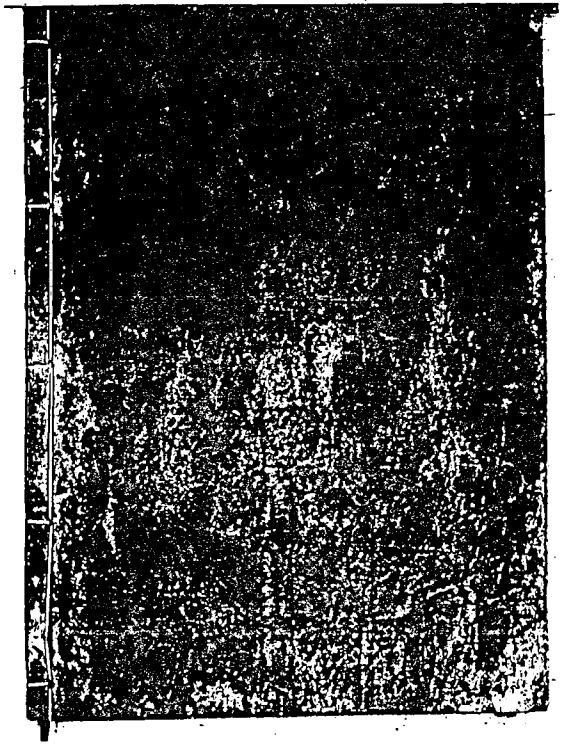
一	同抄	十卷	稽古錄	一卷
一	同考	一卷	鬼神論	一卷
一	老子經集註	一卷	十段文註	一卷
一	錦繡段	二部	在傳集解	六卷
一	同抄	五卷	日文類	三卷
一	終身抄	六卷	詩格	一卷
一	千家詩	一卷	詞話註	一卷
一	同首書	一卷	新詞錄	二卷
一	古文詩	一卷	樺林几月集	一卷
一	江湖風月集	一卷	長恨哥	一卷
一	扶桑十家集	一卷	胡曾詩	一卷
一	同名詩	三卷	詩法披幻	一卷

一 蘇海集	一 卷	大追物語	一 卷
一 菊乳百詠	三 卷	大以論	一 卷
一 菊乳詩笑	二 卷	勢陽海記	一 卷
一 西辰紀行	一 卷	聚樂物語	三 卷
一 續盤石抄	二 卷	牡丹鏡	三 卷
一 蘭卷元	二 卷	高野大景	一 卷
一 繪本宝鑑	六 卷	牡丹道和	二 卷
一 甲乱集	一 卷	覆醬集	一 卷
一 徒然文段抄	七 卷	伊勢物語抄	一 卷
一 圖書校傳抄	二 卷	身延道記	一 卷
一 菅原政華分解	一 卷	撰集抄	三 卷
一 春秋元傳序	一 卷	傷秋草陳	一 卷
一 書簡物語抄	一 卷	海草	三 卷
一 王代一覽	七 卷	名采手鏡	一 卷
一 字彙	五 卷	漢玉芳	一 卷
一 神祇服記	一 卷	中臣瑞穂抄	一 卷
一 神杜考	六 卷	神道名目	三 卷
一本		神代卷	
一 天選	一 卷	通鑑節用	一 卷
一 赤水玄珠	一 卷	群書六言	二 卷
一 韻定文成	一 卷	四書	二 卷
一 少微通鑑	九 卷	詩冠	二 卷
一 元傳合註	一 卷	花史	二 卷
一 必讀古文	六 卷	詩學大成	六 卷

一 書籍目錄	小本	京町二重	一 卷
一 食物考	三 卷	伏錦抄	一 卷
一 百五十五集	一 卷	百文後集	一 卷
一 節存紀系	二 卷	增補助語碎	一 卷
一 康政後句	一 卷	本杜後句	一 卷
一 聯句物語抄	一 卷	三解志詩	一 卷
一 杜律集解	一 卷	三重韻	一 卷
一 任兼年表錄	一 卷	三體思然句	一 卷
一 山谷後句	一 卷	伊臣改韻	一 卷
一 聚分韻	一 卷	葵采標題	一 卷
一 日用食性	一 卷	續錦結段	一 卷
一 年中改矣	一 卷	新選對類	一 卷
一 聯珠詩格	一 卷	詩文大解	一 卷
一 修在集卷	一 卷	嘉多言	一 卷
一 湯川寸句	一 卷	柳珍略韻	一 卷
一 韻鏡	一 卷	大名鑑	一 卷
一 回春	一 卷	全九集	一 卷
一 秋夜要言	一 卷	抄書	一 卷
一 三波朋文集	一 卷	肝文雜記	一 卷
一 詔錄	一 卷	雜記	一 卷
一 史學	一 卷	字正	一 卷
一 二節集	一 卷	無題要集	一 卷

正徳二年六月廿五日書之  
正方寺秋空意





【相伝義書】相伝家の聖教目録について〔〕